

---

# 長浜☆戦国時代

鳴瀬 弓月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長浜☆戦国時代

### 【Nコード】

N1247BA

### 【作者名】

鳴瀬 弓月

### 【あらすじ】

豊かな自然に恵まれた美しい小国、長浜国。この国独自の制度である“お旗女”候補の朝芽は、修行先での早春の一日、師の求めに応じて泉に向かう。そこでは一人の若き武人が、彼女の目の前で水中に身を沈めていた……。

時は室町・戦国時代。長浜国軍武将にお旗女<sup>はため</sup>として仕官した“私”こと少女朝芽の、恋と戦場の冒険。

## 第一章 出会は冷たい泉の中で（前書き）

この物語は、日本史を参考にしたフィクションです。実在の地名、歴史、人物とは関わりがございませんのでご了承ください。

## 第一章 出会は冷たい泉の中で

(1)

つい先日まで豪雪に硬く閉ざされていた<sup>そま</sup>杣道が、今では柔らかな陽春の息吹に包まれていた。

枝々では小鳥がにぎやかにさえずり合い、風にはじける新芽の香りが心地よい。

深い谷間に鶯がまた、ピピピピーツ、と鋭く啼いた。

奥山にも、春は忘れずに訪れてくれる。

<sup>ながはま</sup>長浜国。<sup>かせい</sup>華正元年、戦国時代。

山を下りればそこは修羅の業が渦巻く戦乱の<sup>ちまた</sup>巷。血で血を洗う人の世の荒野。しかしそれを想うには余りに平和で美しい、春の仙郷だった。

山道を上りつめると、目の前の景色が厳しく変わる。

柔らかな新緑の木々は影を潜め、代わって荒々しい山肌が深い谷間に向かって落ち込んでいる。道は細かいガレ場となって、水墨画のようにそびえたつ険峻な山々を見上げながら、青く沈む谷底目がけて続いている。目的の泉が、すぐそこにあった。

私は、手にした甕を落とさないように持ち直すと、崖の細道を注意して下りて行った。

この谷の泉で、師の求めに応じて澄んだ水を汲むのが私の仕事である。

透き通った香りのこの深山の泉水は、師が立てる舶来の茶の湯に

最適なのだそうだ。そしてその茶をふるまわれるのは、十里の彼方にある長浜本城からの“お客人”が来る時と決まっていた。

「朝芽、聞いた？ 今日のお客人はお武家様って噂よ」

社殿を出るとき、親友の水杖が興奮した面持ちでささやいてきた。  
「それも四人ですって！」

「四人も？」

「どんな方かしら。私たち、お目にとまれるかしら？」  
愛らしい頬に手を当てて、水杖がうっとりつぶやく。

私は、そんな親友のしぐさに思わず微笑みながらも言った。

「あまり期待しちゃだめよ、水杖。この社には五十名ものお旗女候はため補がいるのよ。お役をいただくには、まずはお師様のご推挙が必要だし……」

それに、と後の言葉を心でつぶやく。

私たちの一生がかかってくるのよ。

そう言う代わりに「行ってくるね」と声をかけ、少しシヨボンとした友の顔を気にしながらも、私はいつもの山道を歩き出したのだ。  
った。

長浜は、日の本有数の巨大な湖水に面した小国だ。気候は温暖、風土は豊かで、道行く人々の顔も明るい。湖から上がる新鮮な魚介類と肥沃な土地に実る農作物は、“万年豊作国”の名にふさわしい潤いを下々の生活にまでもたらしている。

豊かさの元はそれだけではない。

長浜国守護、土岐氏は代々名君の家柄で、現領主、土岐定照様もまた、仁愛の心根優れたお方よと、専らの評判だった。

自ら城を出ては農村に交わり、親しく治水や収穫の悩みを聞くと

つては年貢に反映させ、苦しむ民草を少しでも減らそうと奮闘されている。

また政治や軍学にも詳しく、おそばを固めるご家老衆も、みな、名うての逸材ばかりであった。

沃土に加えて京師みやこに近い交易の要衝。近隣諸国がこれほど“おいしい領地”を見逃すはずはない。

小国であるのが更に食指をそそののか、甲兵こうへいの波はこの名君の美しい国にも容赦なく押し寄せていた。国境付近では今もなお戦闘が続く、近隣国主の悪意をくんだ浪人たちが、夜盗や山賊となって街道の平和を脅かしていた。

しかし、長浜国はびくともしなかった。

肥沃な土地と名君に育てられ、代々続く優れた武人たちを将と仰ぎ、誇りと忠誠心を強く持った長浜軍は、すさまじく強かったのである。彼らは一丸となって愛する国土を守ろうと、押し寄せる世の波にあらがった。そして多くの戦場で、美談や武勇伝と共に勝鬬かちどきを上げた。

それは、今も続いていた。

昨年の秋、私は親友の水杖と共に故郷を出て、深山霊峰のふもとにある観瀆社みたぎしやでん殿：武人お旗女養成所：に奉公に上がったのだった。お旗女はためとは、長浜軍武将専属の侍女の総称で、軍営における武人たちの日常の世話をうけたまわる。勿論戦場にも同行し、本陣にて主のお世話をつききりで行うため、時には命を投げ出す覚悟も必要となる。そのため、お旗女と主の武人の間には、強い信賴関係がなによりも不可欠だった。

良き相性の主にお仕え出来るか、それが私たちお旗女の人生を決めると言っても過言ではない。

深山霊峰のふもとで日々の厳しい訓練に耐え、一通りの武術と儀式作法をたしなみ、一人前と認められると初めてお旗女候補として

名前が本城に送られる。その後は社殿の師のかたわら近く仕えながら、主となるべき運命の武人に選ばれる時を待つ日々だった。

私も、水杖も、すでに候補としての名乗りはすませていた。

どちらかが：運が良ければ両方が：いつ選ばれても不思議はない。覚悟はすでに決めていた。

だけど私は水杖ほど今日のご使者に関心を持つことができなかった。むしろ、客人がただの、いつものご城主様のお使者であってほしいと願っていた。

私は、怖いかもしれない。

「いやね、こんなことを考えるなんて」

我知らず思いを口に出し、ハッとあたりを見回す。誰もいない深山の崖道であることを思い出し、ほっと安堵の息をつく。

「さあ、早く戻らなくちゃ！」

気を取り直し、足を踏み出した私は、目的の泉の方を見て思わず息をのんだ。

誰かが水の中に入っている。

一目で武人だと解った。こがね色の胴巻鎧どうまきよろいに篠小手しのこての軽装。歳は若い……私より少し上と言ったところか。青ざめた顔で水中を見つめ、そのままざぶざぶと泉の中へと入っていく。

入水自殺だ！

「あっ……だめ……っ！」

思わず叫んで、私は駆け出した。足元で砂が崩れて滑りそうになる。何度も転びかけては体を立てなおし、私は必死で崖を駆け降った。

滑り込むようにして泉のほとりの砂地に駆け込み、甕かめを……それで

もそつと下ろす理性はまだ残っていた：地面に寝かすと、泉の中に飛び込んで行く。

冷たい。

陽春とはいえ、深山の谷間にこうこうと湧き出る泉水は、足がちぎれるほどに冷たかった。

それでもためらう暇はなかった。見る間に腰、胸と上がる泉水を掻き分け、わらじに付いた埃で澄んだ水が濁るのもかまわず、彼方の人影に突進する。

泉の人影は止まらない。もう肩までの深さまで進んでいた。栗色の髪が顔の半分を隠すくらいにうつむいて、思いつめた様子で両腕を水の中に入れていた。今にも顔をつけて沈んでしまいそうだ。私の全身に鳥肌が立った。

「死んじゃ駄目えーっっ！！」

夢中で叫びながら水面をたたく。深みにはまり、思うように足が進まない。

人影がはじかれたように顔を上げた……と思った瞬間、足が滑って、私は泉の中に倒れ込んだ。

バシャン！と派手な音が聞こえ、一気に視界が青くなる。頭の先までしびれるような冷たさだ。あわててもがくが、社衣が体中に巻きついてうまくいかない。溺れる、と思った瞬間、力強い腕が私の腰に回り、ぐいっと水の中から引き揚げてくれた。

「おいおい、大丈夫か！」

びっくりしたような声が聞こえた。激しくせき込む私の顔が水につからないように、たくましい腕がしっかりと支えてくれている。

私はそのまま抱えられるようにして、泉のほとりへと戻ってきた。



「あ…ありがとうございます」

殆ど引きずり上げられるようにして、泉のほとりの草地に這いあがった私は、喘ぎながら頭を下げた。

「苦しくないか。水は飲んでないか？」

肩で息をする私の側にしゃがみこんだ相手は、心配そうにのぞきこんだ。彫りの深い顔。すっと通った鼻筋。細身の長身、日に焼けているがきめ細かい素肌の持ち主で、一瞬はかなげな印象も受けるが、意志の強そうな顎の線や、鎧の上からも解る引き締まった体躯を持つ、堂々とした武人だった。

涼やかな瞳が、真っ向から私を見つめる。一度に頬が熱くなった。

「大丈夫です……」

「寒いだろ。何か着る物を……」

そう言って立ち上がった黄金色の鎧が、日の光に反射してきらりと光った。

そこからも途切れることなく泉水が滴り落ちている。

その瞬間、私はなぜ自分がこんなことになったのかを、鮮烈に思い出した。

「あっ、あのっ、」

あわてて後ろ姿に声をかける。

「お助け下さり、ありがとうございます。でも、あなた様が死んではありません！ 入水だけはおやめ下さい。私、あなたが水の中に入るのを見て、それで、つい……」

言葉が途切れる。

相手は、真ん丸な目をして振り向いていた。

「入水？ 俺が……？」

「……違うの……？」

「……。」

沈黙……。

次の瞬間、若き武人は、腹を抱えて大爆笑した！！

はじけるように笑う相手を呆然と見つめる私の上に、突然大音声  
が降ってきた。

「コラアーツ凌介<sup>りょうすけ</sup>！！　いつまで水遊びしてんだお前はよおッ！  
早く行かねえと日が暮れちまわあ！」

仰天して空を見上げると、はるか高い山肌の岩場に、今一人の武  
人が仁王立ちになってこちらを見下ろしているのが見えた。目の前  
の青年とは対照的な、深紅の戦服の、派手ないでたちの若者である。  
頭を振り立てて喚くたび、そこに豪快に巻かれた華やかな鉢金<sup>はちがね</sup>が、  
ぶんぶんと鮮やかな尾を引いている。

「おう！　影芳<sup>かげよし</sup>か！　すまん！」

叫び返した黄金色の鎧が、ハッとしたように私を見る。

「すまないが、これから主命で急ぐところがある。びしょぬれの君  
を置いていくのは気が引けるが…」

「大丈夫です。一人で帰れますから」

申し訳なさそうな相手の言葉をやんわりと遮る。これ以上心配を  
かけてはという思いもあった。

「そうか。気をつけてな」

私が微笑むと、青年も、笑顔になった。笑うととても魅力的な表  
情になる。思わず心臓が高く鳴った。

「あ、ちよっと待ってろ。」

言うや否や、彼は跳ね起きるように振り向くと、はるか高い人影  
に向かって大声で怒鳴った。

「影！　荷の中に単衣<sup>ひとえ</sup>があっただろッ！　投<sup>な</sup>げてくれッ！」

「なんだと！？　これは先方への土産にと備中殿<sup>びちゅうだう</sup>が…」

「いいんだよ！　箆<sup>たんす</sup>箆<sup>たんす</sup>に着せるために持っていていってもしょうがねえ  
って！　早く寄越せ！」

渋々、といった感じで、美しい包みが投げ落とされる。器用にそ

れを受け取った若者は、私の元に駆けてくると、

「これ、着なよ」

そっと手渡してくれた。

戸惑う私にっこり笑うと、そのまま踵きびすを返し、見る間に崖道を駆け上がっていく。重い鎧から雫が散るたび、黄金色の光が空に散った。その姿が美しいほど軽々と岩を伝って友人の元へ駆け上がると、二人はそのまま崖道にいた馬に飛び乗り、鮮やかな手綱さばきで駆け去って行った。

午後の斜陽を雲が遮り、谷間にさっと影がさした。私は急に一人になった寒々しさを感じながら、急いで体を起こした。凌介と呼ばれた黄金鎧の青年の笑顔が温かくよみがえり、また頬が熱くなる。入水じゃなかった安堵もあった。じゃあなぜあのようなところに？ 何をしていたの？ 出来れば、理由も聞いてみたかったけど、それにしても、止めに入った私が逆に助けられたなんて、あまりに格好がつかないわ……。

取りとめのないことを思いながら、頂いた包みをそっと開くと、中にはとても美しい翡翠色の着物が入っていた。

思わず感嘆の声を上げる。すぐに手を通すと、まるで羽根のように軽く、ふんわりとした着心地が、春風のように暖かだった。

いつもの時刻より大幅に遅れて社殿に帰り着くと、門の前で親友みなづえの水杖が、心配そうに迎えてくれた。

「いったいどこへ行っていたの？ 心配したんだから！ お師様も気がかりそうにさっきまで覗いていらしたけど、ちょうど今お客様が来て……」

ああ、間に合わなかったのだ。これでも思いきり山道を駆け戻ってきたのだけれど。

社殿では、定められたものしか着衣が許されない。硬い社衣に着替え、髪を整えていたため遅くなってしまったのだ。

あの美しい翡翠の着物は、あたたかな思いと共に部屋の文机においてきた。凌介と呼ばれた青年の、屈託のない素敵な笑顔。私を抱え上げてくれた腕の力強さ。思い返すたびに、まだ頬が熱くなる。

主命によるお使いの途中と言っていた。あのもう一人の若者も同様、いずれ長浜軍の武人の一人だろう。私がお旗女として戦場に出る身ともなれば、いつかまた会うこともかなうのだろうか。

「ご泉水、間に合わずに申し訳なかったわ。お師様はお怒りかしら。」

沸き起る思いを振り払うようにつぶやく。もう考えちゃいけない。もう思い出してはいけない。

二度と会うことはない。熱い思いを冷たくねじ伏せる。

「バカね、茶の湯よりも朝芽あさめの方が大事に決まってるじゃない。無事帰ってきたと解れば笑って迎えてくださるわよ」

ほっとしたように笑う水杖の存在を、私はありがたかった。この友がいなければ、そして厳しくも温かく見守ってくれている師の存在なくしては、とてもここまで苦しい修練の日々を切り抜けられなかったと思う。

その彼女が、不意に声をひそめた。

「それでね、来たわよ」

「え？」

「お武家さまが四人。」

「そう……」

「控え所は大騒ぎよ。一度に四人もお旗女はために上がるのは、初めてですって。四人の中には、いかにも恐ろしげな髭の親父もいたっていうけど、構うものですか。ああ、いいわね。私も選ばれないかしら！」

水杖は、華やかな長浜のお城や、交易も盛んな城下町を訪れることに、常々憧れていた。城勤めともなれば、その思いもかなう。過

去には召された武人に可愛がられて、ついにその妻の座を射止めた幸運なお旗女もいたと言う。身寄りもなく、帰る家もない私たちに  
とって、新しい居場所を夢見るのはごく当然のことだろう。

そうは解っていても、私はやはり、心の臓をギュッと掴まれたような強張りをほどくことができなかった。

御指名から完全に外れるまでは：

「一緒に、いけるといいわね！」

水杖が、私の思いとは対照的な、屈託のない笑顔を向けてきたとき、澄んだ鐘の音が社殿に響き渡った。

「お召しだわ。決まったのよ！ さあ、早く大広間に行きましょう！」

水杖が興奮したように言って私の手を引き、美しく掃き清められた社殿の内庭を走りだした。

(3)

七十畳はあろうかと思われる広々とした大広間が、水を打ったように静まり返っていた。

五十名からの、お旗女候補の女性たちが、美しくそろって叩頭している。私も水杖も、緊張した面持ちのまま、低く頭を畳に下げて、運命が決まる瞬間を今か今かと待ち続けていた。

辺りはしわぶき一つ、衣擦れの音ひとつ聞こえない。ぴたり、と固まった静寂が、あたりを支配している。

庭でさえずる小鳥の声が、まるで切り離された世界から聞こえてくるようだ。

またひとつ、澄んだ音で鐘が鳴った。

その瞬間、ふすまが開いて、私たちの老師を先頭に、四人の厳めしい鎧姿の武人が入ってきた。もちろん顔を上げるわけにはいかな

いので、過去の経験からの推察である。

着座の気配。部屋の空気が、ピーンと張り詰める。

老師の、穏やかだがよく通る声がした。

「此度、守護職士岐定照様のお達しにより、武人お旗女の選別の運びと相成った。ただいまより四名の名を申す。呼ばれた者は、迅く、隣室へまいりませい。」

すぐ隣で、水杖がかすかに身じろぎした。彼女の緊張も最高潮に達している。

「水杖」

「ハイッ」

親友の絞り出すような声がした。

選ばれた。すごい。良かったね、水杖…！

思わずこみ上げるものを噛みしめた時、老師の声が厳しく呼んだ。

「朝芽」

ハイッ、と、反射的に声が出た。修練のたまものである。しかし私の魂は衝撃で消えそうになっていた。

選ばれた……？ 私……！？

「……以上四名。速やかに参れ」

老師の姿が消えると同時に、広間中にざわめきがわきおこった。緊張が一度に緩む中、私はうつむいたまま汗だくになって固まっていた。後の二人がだれだったのか、それすら頭に残っていない。

「行こう、朝芽！」

水杖が私の腕をつかむ。はしゃいでいるのかと思いきや、その顔は意外にも厳肅だった。いざ呼ばれ、任の重さを改めて実感したのかもしれない。私は茫然と、されるがままに立ち上がった。

「朝芽でございます。まかり越しました」

挨拶に答えて、老師の声が呼んだ。私はこわばる手を励ましながら、ふすまを開けた。作法通りに、下座に控える。水杖も、別の部

屋でどきどきしながら待っているはずだ。これから各々の部屋で、新しい主との対面が行われる。

老師は、窓辺に佇<sup>たたず</sup>んでいた。逆光で、表情はよく見えない。しかし、いつもと変わらぬ穏やかなそのたたずまいが、私の緊張を解きほぐし、心の震えを止めてくれた。

部屋には西日が差しこみ、窓の外には鮮やかな山の夕暮れが見えた。残照を受けて、山々が黄金色に燃えている。それは、昼間の青年の鎧から散った、金色の雫を思い出させた。烏がねぐらに帰っていく。奥の深い谷ではすでに、夜の帳を迎えていた。

半年をかけて見慣れてきたこの奥山の美しい景観も、今日が見おさめになる。お旗女に選ばれた者は、その主と共に速やかに社殿を出なければならぬ。これはもう、例外のない掟であった。

「朝芽。泉からは無事戻ったか。」

老師の声に私は小さく頷いた。親とも思いお仕えしてきたこの恩師とも、別れの時が近づいて来たのだ。不意に寂しさがこみあげて来る。

「今日まで、良く励んでくれた。此度の選では、真っ先にそなたの顔が浮かんでおった。そなたの主は、わしが選んだ。良き運命の出会いとならんことを祈っておる。……健やかにな。」

「お師様も……どうか、おからだ大事に……」

不意に感情があふれ出し、視界が涙でかすむ。老師は少し頷き、すつと姿勢をただすと静かに部屋を出て行った。

この瞬間、私は老師の元を離れ、長浜軍武将専属の正式なお旗女となったのである。

自分の主がどのような武人なのか、それは今は問題ではなかった。どんな未来が待っているように、命をかけてお仕えする。それが私の運命なのだ。

心が引き締まる。今までの不安がうそのように消えていく。

私は新しい未来へ踏み出すその瞬間を、ただひたすら待ちうけて

いた。

ふすまが開いた。

いよいよ対面の時が来たのだ。

私はその場に膝をつき、主を迎える礼をとった。

「やあ、君が新しい侍女頭だね。よろしく頼む。」

声を聞いた瞬間、私は愕然と目を見開いた。

そこには、同じく目を丸くして絶句する、あの黄金色の鎧の青年が立っていたのだった。

〈続く〉



## 第二章 旅立ちの刻（とき）

### （1）

沈黙の部屋を、夕ガラスの鳴き声が鋭く渡って行った。

呆然と見つめあう二人の影が、長く微動だにせず伸びている。

泉で私の心に強烈な印象を残して去った、黄金鎧のたくましい若武者。

もう、二度と会うことはないと思っていた。

それが今、お仕えすべき主として目の前に立っている。

向こうも仰天したようだ。軽快に話しかけてきたのが一転、口を開いたまま絶句している。

しかし、その沈黙は長くは続かなかった。

相手の顔があまりに驚いていたので、私は思わず微笑んでしまったのだ。

『そなたの相手は、わしが選んだ』

老師の声がよみがえる。

運命。数奇な運命。

はじけるように、相手からも笑みがこぼれた。

「……君だったのか」

ひとしきり明るい笑い声が続いた後、青年は屈託なく話しかけてきた。あの魅力的な笑顔がまた現れて、心が温かく解きほぐされていく。

「朝芽と申します。以後、よろしくお導きを」

「いい名だな、朝芽。俺は出石凌介。長浜軍長柄足軽一番隊隊長だ。高砂備中守様の差配下にいる。普段は天槻城で、長柄隊の調練を担

当している。」

長柄隊は、長槍部隊だ。守攻の中核を担う強力な中堅軍である。天槻城は、領主様のいる長浜本城から南東五里のところにある平山ひらやま城で、御城下を見下ろす小高い丘の上にあり、一の砦とも言われている。

何度も頭に叩き込んだ情報を引き出す。私の仕事は、すでに始まっていた。

「はは、いいさ。最初からそんなに飛ばすなって。俺もお旗女さんを置くのは初めてなんだ。お互い、ゆっくり慣れていけばいいさ」

「かしこまりました、出石様」

「俺のことは凌介と呼んでくれ。だが目付めつけの前では『隊長』だ」

「はい」

落ち着いた声音。良く透る低い声だった。浮き足立っていた私の心が、ようやくこの現実を追いついてきた。

「凌介様」

「ん？」

「あの時、どうして泉におられたのですか？」

思い切って尋ねる。出会いのきっかけに感謝しつつも、疑問だけがずっと残っていたのだ。

「ああ、あれは……」

相手は恥ずかしそうに口元をほころばせると、ちょっと下を向いていたが、

「……落としちゃってさ」

「えっ」

「俺たちの上役、高砂備中様たかさごびうちゅうの御免状……社殿に入る許可証みたいなものだが、影芳かげよしの奴が見たいと言うから、鞍の上から投げたんだよ。それが手元が狂ってあの泉にどぼん。」

ああ、それであんなに深刻な顔で、泉の中を見つめていたのか。

「参ったぜ。なんせこっちは初参者だ。追い返されてはと真っ青になつてね。幸い、老師殿が俺たちのことを覚えていてくれて……影芳はあの風体だからな……それで無事社殿に入れたわけ。」

免状は結局見つからなかったそうだが、結果良しと言うことさ、と凌介様は明るく笑った。

「朝芽が飛び込んだときは、本当に驚いたよ。叫び声と共に姿が見えなくなって、あつ、まずい溺れたかつて、夢中で引き揚げたんだ。まさか俺の入水を心配していたとはね。……あれから大丈夫だったのか？ 急いでいたとはいえ、一人残して、すまなかったな。」

いたわるようなまなざしに、思わず目を伏せる。きつと、ずっと心配してくださっていたのだろう。

初めて出会った印象は間違いではなかった。優しく、たくましい武人。私にとって、これ以上の主の君があるだろうか。老師様は私にとって最高の主を選んでくださったのだ。少々内気で、思い込むことも多い私の性格をよく見ていて下さったのだ。

「さあてと。」

何か張り詰めていたものを吐き出すようにして、凌介様は私を見つめた。

「行こうか、朝芽。」

私はしっかりと視線を返し、大きく頷いたのだった。

「朝芽~~~~~！」

身支度を整えるため、しばし凌介様と別れて部屋に戻ってきた私を迎えたのは、顔をゆがめた水杖みなづえの姿だった。

「ど、どうしたの、水杖!？」

「私の主の君が……っ」

半泣きで口走るのをなだめつつ、ようやく話を聞き出すと、奇しくも彼女の主の君は、凌介様と共にいた、あの華やかな武将に決まったらしい。

名前は真咲影芳。まゆきかげよし 派手ないでたちや猛々しいしゃべり方から推し量られるように、性格も剛胆で荒々しく、陣屋では“烈火将”れつかしやうの異名を持つと言う。

「朝芽の主様は“流水の出石”りゅうすい いづしと呼ばれているんですって。出石様は冷静沈着、反対に影芳さまは大胆豪放で、部下にもかなり容赦のないお方ですって。どうしよう朝芽、私毎日怒鳴り飛ばされちゃう！」

目にも鮮やかな胴巻姿で堂々と現れた真咲影芳は、まるで百花の王のように見えたと言う。しかし、この君ならとときめいた水杖の期待を思い切り裏切って、初対面からビシバシしごかれたそうだ。

足は速そうだが細すぎる。声が小さい！ 女だからって特別視はしねえ。心してついて来いや！

一人二役の迫真の演技でその時の模様を再現する水杖に、思わず私は笑ってしまった。

「もう、人が真剣に悩んでるのにつ」

そう言って膨れた水杖だったが、本心では真咲様に惹かれているのが見て取れた。顔色で解る。文句を言いながらも、紅潮した頬や、生き生きと主の君についてしゃべる口元がそれを証明している。

私たち、良い主に巡り合えたのね。

私は心の中でそっとその思いを抱きしめた。

真咲様は長柄足軽二番隊長を務めている。凌介様とは同じ軍務に就くため、私と水杖も同じ足軽長屋に詰めることになる。一度は別れを覚悟した親友と、これから行動を共に出来る予感が、嬉しかった。

ひとしきり愚痴って憂さが晴れたのか、水杖は私が荷物をまとめ

るのを手伝いはじめた。

「本は置いていくわね。これはどうする？」

翡翠色ひすいの単衣。私は少し迷ったが、結局荷物の中に入れた。主の君からはじめていただいたお着物だから、と。

つづらの中身をまとめていた水杖の手が止まった。視線の先には、美しい螺鈿らでんの蒔絵箱まきえばこ。中では血のように赤い紅玉が、まるで意志を持つ者のように妖しく輝いている。

「朝芽、これ……」

守り神の証。先祖から連綿れんめんと伝えられた、私の唯一の血脈の証。

「持ってきたのね。故郷から……」

水杖も、その紅玉が意味するところをよく知っていた。

ふと、不安が胸をよぎる。

凌介様に、いつか、この紅玉をお見せする日が来るのだろうか。

私の……いや、お旗女はためすべてのともいえるある宿命について、語る日が来るのだろうか。

しかし、私は瞬時にその思いを打ち消した。今は、それを想う時ではない。

山上の月が、辺りをこうこうと照らす中、私と水杖は半年を過ごした社殿を後にした。

聖殿に糠ぬかづいた後、社殿奥の老師の居室に向かつて拝礼する。老師の部屋には、まだ灯がともっていた。そこから無言で見送る目があることを、私も水杖も良く解っていた。

社殿の門を出る直前に、もう一度私たちは立ち止まった。この門をくぐれば、もう二度とここへは帰れない。しかしもうためらいはなかった。

行ってまいります。

別れの言葉の代わりに、決意をこめて。

深く頭を下げた私たちは、門の外へ、新しい運命に向かって、迷

わずその一步を踏み出した。

凌介様との待ち合わせは、観瀆社殿の東門のそばだった。天槻城には、真咲様と連れ立って帰ると言う。水杖と共に出発できるのは、とても心強い。月明かりの中に浮かび上がる幻想的な山々を眺めながら、私たちは何か荘厳な気持ちで、それぞれの主が来てくれるのを待っていた。

門から一人の武人が出てきたのは、その時だった。  
後ろに、小柄な影を従えている。

私たちには、初めて見る顔だった。しかし今日、観瀆社殿を訪れた四人の武将の一人であることは、容易に想像がつく。

「俺は足輕歩兵第六番隊隊長、岩見<sup>いわみ</sup> 尽四郎<sup>じんしろう</sup>だ。お前ら、お旗女の女どもか？」

野卑な声で武将が名乗る。黒い鎧が近づいてくる。嫌な予感があった。

## (2)

水杖<sup>みなづえ</sup>が、身構えるのが解った。

岩見尽四郎と名乗った黒鎧の武人は、わずか数歩で私たちの前に立ちはだかった。傲慢な腕を組み、舐めるような視線で見下ろしてくる。視線が動く。私。水杖。そしてまた私。

視線が私の上に止まる。

月が雲に隠れ、また現れた。

月明かりに照らされた目の前の男は、かなりの巨漢だった。猪首の上に、つるりとした顔が乗っている。それはほとんど無表情だったが、瞳に浮かんだ陰惨な光と、肉厚の口元に浮かんだ寧猛な笑

が、ある種の凄味を見せていた。私は思わず、半歩下がった。

「お前」

不意に太い指が、ぐっと私の胸元を指した。ぞくり、とその一点に寒気が走る。

「代われ、こいつと」

後方に顎をしゃくる。その時、初めて私は彼の巨体の影にもう一人、小柄な女性がいることに気がついた。

今日選ばれたお旗女のひとりだ。名前は、確か……

さわらび  
「早蕨？」

水杖が恐る恐る呼びかける。影は、びくり、と肩を震わせて、ますます小さくなった。

「この女は気に入らぬ。俺は美しい女が好みなのだ」

岩見が早蕨をにらみつけ、吠えるように言った。

「当てつけに、こ奴の細頸、締めてやろうかとも思うたが、替えの女が3人もいるのだ。むざむざ殺すも寝覚めが悪い」

「なん……ですって！」

水杖が鋭く叫んだ。

「命を何だと思っているの！？ 私たちはモノじゃない！ それにお仕える主も決まってる！ 師の決められたことをないがしろにするの！？ いいえ、あなたのような嫌な男に、だれが従うものですか！ 早蕨、逃げて！ 社殿に戻り早く老師様に……！」

アアッ！ と悲鳴が上がった。いきなり丸太のような暴風が私のそばを通り抜けたと思った瞬間、すぐ横にいた水杖の小柄な体は、向こうの茂みに向かって思いきり吹っ飛ばされていた。

岩見が殴り飛ばしたのだ！ 低木の茂みに叩きつけられた水杖は、ザザッと葉を撒き散らしながら地面に落ちた。あまりの出来ごとに、私は茫然とその光景を見つめた。しかしそれも一瞬のこと、大切な友達を傷つけられた怒りに、カアッと体中が熱くなる。不意に後ろで気配が動いた。振り向いた私は目を疑った。縮こまっていた早蕨が、大きく首をのばしている。そのぼさりと垂らした前髪の下には、

信じられない表情が浮かんでいた。

彼女は、呻く水杖を眺めながら、声を立てずに笑っていた。

その瞬間、私の中で何かがはじけ飛んだ。

「よくも水杖を！」

体の底から声が出る。

にやついていた岩見の巨体が、びくつ、と止まる。異形のものを  
見るように、私の上に視線を這わせる。

ドクン！

胸がいきなり熱くなった。袂たもとに隠した紅玉が、私の鼓動に合わせて鳴動する。

いけない！ 心を失ってはいけない……！

私の中で何かが叫んでいる。しかし、旅立ちの門出でいきなり晒さら  
された暴虐に、私は逆上する自分を止めることができなかった。

紅玉が、あざ笑うかのように発光する。

岩見が、ぎょつとしたように目を見開いた。私は真っ向からその  
視線を受け止め、跳ね返した。視界が金色に染まる。今、私の目は  
きつと輝いている。まるで深山を徘徊する伝説の獣のように。体に  
すさまじい力があふれ始めた。強い力に引かれるように背筋が伸び  
る。岩見の表情が凍りついた。信じられぬ！ とでも言いたげに、  
その目があわただしくまたたかれる。

「朝芽！ 止めてー！ーっ！！」

その瞬間、水杖が絶叫した。

その声は灼熱しゃくねつの脳裏に氷の刃のように突き刺さった。ハッと我に  
返る。途端に、せり上がって来ていたすべての力が、流れ出す汗の  
ように霧消していくのが解った。

岩見が目をぱちつかせた。時間にすれば、わずか数秒の出来事で



ある。今見た光景は、おそらく、なにかの錯覚と思ったのだろう。

「貴様あああ！」

ごつい腕が私をつかんだ。両腕が万力のような力で締め上げられる。

足が宙に浮いた。

岩見は私を、つかんだ腕ごと宙に持ち上げ、ぶんぶん揺さぶった。ぐらりと天地が揺れる。すさまじい力だ。

「ゆすり殺してやる！」

狼狽<sup>ろうばい</sup>しかけた自分を糊塗<sup>こと</sup>するように、岩見は私を振り回し続けた。月が乱れ飛ぶ。ぐらりとゆがむ視界。

「いい気味」

早蕨の、冷たい声がした。私は半分気を失っていた。聞き慣れた声がしなければ、そのまま暗黒の淵に沈んでいったことだろう……。

「お前！」

突然鋭い叫びと共に、ひゅんっと空気が動いた。途端に両腕が解放されて、私は地面に放り出された。

巨漢の黒い鎧が、勢いよく宙に浮くのが、涙でにじんだ視界にちらりと映る。

どおおん！

地響きを立てて岩見が落下した時、私の体は力強い両腕に抱き起こされていた。

「朝芽！ おい朝芽！ しっかりしろ！」

ふらつく頭を振って目を開ける。ぽっかりと空いた視界に、必死に覗き込んでいる凌介様の白い顔。

ああ、来てくださったんだ……

「岩見……てめえ、なにしゃがんだ！ こんなことされて黙ってられると思うのか！」

凄味を含んだ低い声で、凌介様は前方の闇をにらみつけた。その

先に、ゆらりと立ちあがる岩見の具足姿。

「売られたケンカは買うぜ。こいつの代わりにな。」

気だるげな別の声が聞こえた。痛む首を曲げると、そこには水杖の主……真咲様が、岩見の背後を突く形で立っていた。薄笑いを浮かべていたが、その体からはすさまじい闘気が立ち上っている。彼の足元には、水杖が突っ伏していた。

若侍二人に囲まれた岩見尽四郎は、何も言わずに踵を返した。腰を低く落として身構える凌介様の横を、わざとかすめるように通り過ぎると、上目づかいに様子を見ていたお旗女の早蕨を小突いて、闇の中に消えていった。

「なんてこった」

凌介様がふうつと息を吐いて肩を落とす。真咲様はぶぜんとした表情で、派手な肩布を裂き、腰筒の清水で濡らしている。二人は待ち合わせに遅れたわけではなかった。ご領主様のこまごました用事を老師様に伝えている間に、あの妖人がたまたま私たちに目を付けたらしい。

「しかし俺あ一瞬、ついに倒したかと思ったぜ。あの蹴りはすさまじかったな」

真咲様が無理やり明るい声を上げる。

「その方が、長浜のお為だったかもな。」

凌介様が陰気につぶやいた。

目の前で、水杖がしゃくりあげている。私はぎゅっとその手をにぎりしめてうつむいていた。つい先ほどの光景が、何度もよみがえり、思わず唇をかみしめる。凌介様はそんな私をいたわるような目で見ていたけれど、おそらく私の本当の怯えには、気づいていなかっただろう。

あの時、水杖が叫ばなかったら。

私は、取り返しのつかないことをしていたかもしれない。

「朝芽」

水杖の小さな声がした。ハッと手をにぎりしめる。

目の前に、親友の笑顔があった。まだ涙にぬれた頬。その口が小さく動く。

（大丈夫。誰も気づいてなかったよ）

私はギュッと目をつぶった。涙がこみ上げてくる。もうどうしようもなくあふれてくる。その時肩に手がおかれた。そして、凌介様の低い声が、優しく話しかけてきた。

「泣くなよ。もう忘れようぜ」

思わず見上げると、涼やかな瞳がじっと私を見つめてきた。

「武人の世界は、樂園じゃない。これから、もつと非道いことだつてある。それでも俺たちは、進まなくちゃね。あんな小人に、いちいち構ってられるかって。」

私はうつむき、ぐっと涙をのみ込んだ。温かく広い掌が、ギュッと私の両肩をにぎりしめた。

「俺の部下は、俺が守る」

幸い水杖にけがはなく、泣きたいだけ泣くと、恥ずかしそうに腫れた目元を隠していた。最もその袖口は、すぐ真咲様の手で荒々しく引きはがされ、冷たく絞った先の肩布で強引に冷やされていた。本当は優しい方なんだ……と、衝撃の連続の中、ほっと嬉しくなったことを覚えている。

暴風は去った。私たちの心に深い爪痕を残して。

闇に消える寸前の早蕨の顔を、私は忘れることができなかった。

赤く光る目。憎悪にゆがんだ顔。あれは本当に、私と同じお旗女の見せた表情だったのか。

「まさか門出に“長浜の凶星”<sup>（きょうせい）</sup>に出くわすとはな。社殿では大人し

くしていやがった癖によ。あいつは辺境勤めだから、当面、あのツラは見ねえで済むってのが救いだぜ。あれで城代家老の縁戚ってんだから、始末がわりいや。ただだけ凶行を犯しても、すぐに誰かがもみ消しやがる。……しかし老師様のお庭先で、まさかお旗女に手を出すとはな。」

しゃがみこんで、水杖の頬を冷やしていた真咲様が、吐き出すように言った。その言葉で、なぜ、あのような侍が、軍律厳しい長浜軍にいられるのかも、解ったような気がした。

「あいつは獣だ。人の道理が通じねえ。お前ら、今度見かけたらすぐに逃げろよ。」

真咲様が水杖に言い聞かせている。凌介様は無言で、馬の鞍に荷をつけていた。

「なあに、あいつの正体は臆病者さ。弱い者いじめしかしやがらねえ。戦場で会えば真っ先に狙い撃ちだぜ。それを器用に逃げ回りやがる。あいつは長浜の侍全員を敵視してやがるから、それは、つまりみんながあいつの敵ってことで……、あーつくそっ、やつは説明まで混乱させやがる！　つまり、奴には、近づくな！！」

しゃべっている内に訳が解らなくなってきたらしい真咲様が、腕を振り回しながら喚く。水杖が吹き出す。続いて私も思わずクスツと声を漏らした。

つられたように振り向いた凌介様からも笑顔がこぼれる。

明るい笑い声が辺りにはじけた。暗い思いが、見る間に洗い流されていく。

「なんだよ、お前ら。おれは心配してだなあ！」

真咲様だけが腕を組み、口を尖らせてみんなを見回していた。

月が照る山道を、私たちは二頭の馬に分かれて走った。

「よっしゃ！　競走だ凌介！　先に天槻に乗りつけた方が酒樽一つおごるんだぜ！」

水杖を鞍前に載せた真咲様が、ヒャッホウ！と奇声を上げて手綱をさばく。見る間にその姿が小さくなっていく。

「はは、アイツ、勝てもしねえってのに、毎回よくやるよ！」  
明るく言い捨てた凌介様は、いきなり馬首をめぐらした。

「近道行くぜ！ そらっ」

馬が飛ぶように崖道を下り始める。私は鎧にしっかりとつかまりながら、吹きさす強風に逆らって叫んだ。

「なんだってっ！？」

ともすればつんのめりそうになる力に必死で抗いながら、凌介様が叫び返す。

「私、あなたにお仕え出来て良かったです！」

今度の声は、きちんと聞こえたかどうか……。

月明かりを一身に浴びながら、険峻な崖を見事に下りきった馬は、  
一路、天槻城あまつぎ目指して暗い山道を疾駆していった。

〈続く〉

### 第三章 お書物庫騒動・前編

#### (1)

観瀆社殿みたきしやでんの一修練女であつた私が、長柄足輕一番隊隊長・出石凌いづしりよ介様のお旗女うすけとして天槻城あまつぎに入城してから、十日が過ぎた。正直、この間のことはほとんど記憶に残っていない。あまりに早く時が流れすぎたので、振り返る暇も、感じたことをゆつくりと心に刻みつける暇もなかったのだ。ただ、怒涛のように始まったご奉公初日のことだけは、かろうじて思いだせる。

天槻城に到着したのは、十日前の明け方だった。観瀆社殿みたきしやでんを含む国内でも有数の険しい山々はすでに後塵こうじんの彼方に隠れ、これだけは変わらぬ春の月が、初めて目にする西の平野に優しく傾いていたのを覚えている。

東の空が明るくなり、野に朝霧が立ちこめる中、小高い丘の上に未だ黒い影となつて佇む天槻城は、とても幻想的に見えた。

しかし、その感慨にふけっている暇はなかった。

着到ちやくとどうと同時に凌介様は、まだ静かな足輕長屋の一角の小さな角部屋に私を連れて行つた。

「ここが朝芽あさめの控え部屋だ。最初はちよつとうるさいが、なあと、すぐ慣れるさ。」

私物を入れるつづらに小さな文机ふづくえ。壁にはお茶室のような違い棚。塵ひとつなく掃き清められた板張りの床。朝の静謐せいひつな空気の中、それはこの上なく素晴らしい居室に思えた。押入れには、寝具まで入っている。

「俺は城下に家がある。朝芽も借りたいなら手配はするが……」  
「いいえ。ここで住まわせていただきます。」

「そうか。」

目を輝かせた私を見て、凌介様が頷く。

「では俺は行くよ。朝飯前にひと訓練あってね。」

「私も参ります」

あわてて腰を上げた私を、凌介様は軽く押しとどめた。

「いいから、ゆっくりしてなよ。今にイヤってほど、動くことになるからさ」

凌介様の言葉は本当だった。

朝餉<sup>あさげ</sup>が済むと、それまでゆったりとしていた時の流れがいきなり激流へと変わったのだ。

めまぐるしく私の名を呼ぶ声、次々に出される指示書。それはほとんどが新参のお旗女に対して城内の家臣から与えられるものだったが、おかげで私は休む間もなく、板鐘<sup>ばんしやう</sup>が昼を告げる頃には城内の殆どの場所を覚え、夕刻には日常使う物の位置をすべて頭に叩き込み、翌朝には実務に入っていた。

凌介様は真咲様と共に、早朝から深更<sup>しんこう</sup>まで長柄部隊の訓練や城下見回り、遠駆けに城内雑務と文字通り飛び回っていた。私は親友の水杖<sup>みなづえ</sup>と言葉を交わす暇もなく、朝に主が水浴びをすれば、着替えと櫛盥<sup>くしだらひ</sup>を持って駆けつけ、昼に書簡をしたためるときは、傍らに居て墨を磨<sup>す</sup>った。夕刻ともなれば灯明油<sup>とうみゆうあぶら</sup>を数多ある詰所の行燈<sup>あんどん</sup>に注いでまわり、夜には口頭で受ける明日の訓練科目を回覧書に朱書した。

この辺りの流れは、観瀆社殿ですでに実習済みだったので、めまぐるしい予定ではあったものの、さほど混乱は感じなかった。

しかし、驚いたのは凌介様の素早さだった。

すべての動作が速いのだ。

かつてあの深山の泉で、崖を登る早さにも驚いたものだったが、それはここでも如何なく発揮されていた。

動きに無駄がないのだろうか。同じ仕事をこなす真咲様<sup>まきちゃん</sup>の、軽く

二倍は動いている。

最も真咲様は、手と同様、口の方もかなり動かしていらしたのだ  
が……。

水杖の姿も頻繁に見かけた。部屋は一緒ではなかったが、彼女も  
同じ長屋の一角に自分の居室を与えられているはずだった。

彼女も順調に仕事をこなしているようだった。目が合うと、真咲  
様の方を向いてちよつと肩をすくめ、それから嬉しそうに仕事に戻  
っていった。

そして、ようやくお旗女の新生活にも慣れてきた十一日目の朝。  
私は、天槻城でのある騒動に巻き込まれることになる。

お旗女の重要な、そして特殊な仕事に、漢文の読み書きがある。  
観滝社殿での見習い時代にも、この読み書きの修練はことのほか厳  
しかった。

当時、長浜の女性たちは平仮名を使っていた。しかし、お旗女の  
仕事の内には、隊長の側近として、いち早い地図の準備や出陣先の  
風土の把握があった。必要な情報は、書籍を紐解ひもけばいくらでも調  
べることができたが、その主文のほとんどが漢文で書かれていたの  
だ。

忙しい主に代わって、上役の方々との書簡のやり取りも仕らねば  
ならなかった。その際には流麗な返書を書くことはもちろん、時に  
は特殊な戦用語いくいや、忍びが使う暗号文の解説も求められたので、私  
たちは常に辞書や先史と首っ引きだった。

私は元々、本を読むことがとても好きだった。

見習いの頃も、よく観滝社殿のお文庫所ぶんこしょに入り浸り、頭の中だけ  
は厳いかついのうと、よくお師様に笑われたものだ。



天槻城のお書物庫しよもつこは、本丸から南東に突き出した二の丸の三階にあった。この城では文武奨励ぶんぶしょうれいの氣風が強く、一般兵や、城内勤めの小者まで、男女を問わず自由にご本を読むことができた。番役ばんやくに申し出れば、借りることもできる。

その日、私はまたお書物庫にやってきていた。ここでは二人の番役ばんやくが、交代で詰めている。

「やあ、朝芽どの」

扉の前で、ふわりと立っていた白髭の老人が、私を見てにこにこと話しかけてきた。もうすっかり顔なじみになった、お書物庫番役の老歩兵である。名前は確か、月江様つきえさまと言った。もう一人は目つきの鋭い若い兵士で、今は非番か、姿が見えない。

「いつもお邪魔いたします」

老人が、鍵を開けてくれた。中に入ると、何十年分もの歴史と埃ほこりの、独特な、しかしどこか懐かしいにおいがどっと押し寄せてくる。

「出石殿から聞いておるよ。長浜軍略伝と……それから常梓抄じょうししょう」

「ありがとうございます」

月江老が出してくれた分厚い書物を受け取る。その上にポン、と固く巻かれた小さな包みが乗った。

「ばばが作った団子じゃよ。うちでお食べ」

わあ、と私は目を輝かせた。月江夫人の作るよもぎ団子は絶品で、初めて食べた時はこの世にこんなおいしいものがあるのかと、思わず一人ため息をついた。感動を伝えると、月江様はその後もちよくちよく持ってきて下さった。

「ありがとうございます」

思わず胸に抱くようにすると、月江様は目を細めて笑った。勤めはじめてまだ新参の身ではあるけれど、こういった温かさに触れるたび、ここへ来てよかったと改めて思わされる。

お礼を述べて、部屋を出ようとした時、ふと一冊の薄い本が目にとまった。

表には、

長浜辺境外史へんぎょうがいし

とある。重厚な墨跡が瑞々しい。

最近書かれたものかしら？

心を惹かれて手に取って見る。中を開いた私の目に、見開きいっぱい描かれた絵図面と、

『長浜郡杵築村五郷全図』きつきごじょう

の太い文字が飛び込んできた。

杵築村五郷。

その名を忘れることは出来ない。

私の、故郷。

半年前、水杖と共に殆ど追われるようにして捨ててきた、私の生まれ育った村。

あの山も、この川も、すべてが美しい筆致で思い出の中の景色そのままに描かれていた。

釘づけになった目から、熱いものがあふれ出す。

あわてて袖で拭う。顔を上げると、月江老の穏やかな笑顔があった。

「気に入ったなら、持って行きなされ」

「よろしいのですか」

思わず声が弾んだ。私は、いただいたお団子の包みと共に、そつとその本を胸に抱きしめた。

「朝芽ーっ！」あさめ

暗いお書物庫から、春の明るい光の中に出た私は、覚えのある声にパツと振り向いた。

「水杖！」みなづえ

懐かしい姿が、大きく手を振りながら駆け寄ってくる。

観瀧社殿の東門で別れて以来、時折目を合わせる以外、殆ど会うことのかなわなかった親友。どれだけ話がしたかったことか。

「元気そうね！ よかった！」

駆け寄ってきた水杖は、飛びつくようにして私の両手を握りしめた。

私も、ギュッとその手をつかむ。

「真咲様は？」

「ご城主さまのお供でご視察よ。今日はお旗女はお呼びじゃないんですって。」

可愛く膨れた水杖は、不意にいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「出石様も出て行かれたわ。お二方から命令です。戻るまで、お旗女同士、心ゆくまで情報交換していると！」

顔を見合わせた私たちは、同時に吹き出した。弾けるように笑いながら、私たちを氣遣ってくれた主二人の優しさに、ギュッと胸が熱くなる。

「行きましょう！ 話したいことがたくさんあるのよ！」

水杖が袖を引っ張る。私は月江老からいただいた包みを目の前に掲げ、にっこりと笑って見せた。

日当たりのいい調練所裏手の壁にもたれ、月江夫人自慢のよもぎ団子に舌鼓を打ちながら、私たちのおしゃべりは尽きる処を知らなかった。

「……そこでお使者様が金切り声をあげてね！」

私と比べて積極的な水杖は、城内のうわさにもよく通じていた。まったく、同じ十日間を過ごしたとは思えないほど、彼女の情報は豊富だった。

私もありったけの出来事を話した。この数日間の楽しかったこと、辛かった出来ごと。

与えられた小部屋の話になった時、水杖がちょっと不満げに言っ

た。

「実はね、私、はじめはご城下で暮らしたいと申し出たのよ。影芳かげよし様のお屋敷の女中部屋にでも置いて下さいとお願いしたの。屋敷内に居れば、いつでもお支度に伺えるでしょう。お腰の物や、お具足の手入れなど、やるべき務めは沢山あると思って。……でもね、」

真咲様は、即座にそれを却下したと言う。

それは、奥方の仕事だ、と。

「なんかグツサリきちゃったわ。勿論、私たちは奥方ではないし、そのような高望みをするつもりもないけれど、ああまでハッキリ言われると、なんだか……」

真咲様も凌介様も、まだ独り身だ。おそらく、真咲様は深い意味があつて言われたのではないだろう。お旗女の仕事に明確な規定は無いが、おそらく真咲家では、そこに一つの厳格な線が引かれているのだろう。

しかし、水杖の複雑な気持ちは痛いほどわかった。私もまた、おそらく彼女と同じ衝撃を、その言葉から受け取ったからだ。

それは、奥方の仕事だ。

凌介様も、同じように言われるのだろうか。

あの時凌介様は、城下に住むか？ と聞いてくれた。しかしそれは、あくまでお屋敷の近くにという意味であり、やはりお旗女を自らの住居に上げることは無いように思えた。それは今まで信じ切っていた何かにさつと影が差したような気分だった。思いが顔に出ていたのだろう。水杖があわててごめんね、と言った。

「ごめん朝芽、変なこと言ったね。私は十分満足してるわよ。真咲

様にお仕え出来て、とても幸せよ。」

「うん、いいの。水杖ががっかりするのも当たり前よ。」

水杖は、真咲様を好きになりかけているのかもしれない、とふと思った。

では、私の今のこの気持ちは、どう言い表せばいいのだろう……。」「これを見て。」

群雲のように沸き起こる思いを振り払うように、私は先ほどお書物庫で見つけた『辺境外史』を取りだした。

杵築村五郷の絵図を開く。鮮やかな色彩が頁からこぼれおちる。

水杖がわあ、と懐かしむ笑みを見せた。

「素敵に描かれているじゃない。」

「うん。実際、素敵な村なんだから」

辛かったはずの思い出に微笑むことができるのは、今がきつと満ち足りているから……。

「いつか、また行けるといいわね」

「うん」

私は心からそう言った。

「お書物庫と言えばね」

ふと、日が陰ったようだった。

水杖の声音がすこし、落ちたのだ。

「どうも、荒らされているようなのよ。数日前から」

「荒らされている……？」

「私も詳しくは解らないんだけど、なんとか書棚が掻きまわされ、いくつかの書籍が消えているんですって。」

「まあ、誰がそんな……」

「それが全然わからないのよ。夜の間なのは確実なんだけど、誰も気付かないうちにお書物庫だけがやられているんですって」

「それで、盗まれた書物は？」

「それがね」

言葉を切った水杖は、私の手元にふと視線を向けて、

「地図の本ばかりなんですって」

「地図の……？」

私は思わず、手にしていた『辺境外史』に目をやった。

「あら、その本は違うわよね。外史っていうんだから、歴史とか伝承とか……そういった事が書かれているはずよ。第一、盗まれずに残っているわけだし」

水杖があわてて言葉をつなぐ。私はいいのよ、と笑って

「でも、お書物庫のお番役さまは、何もおっしゃっていなかったわ」「それはそうよ。公にはできないことだもの。ここの御城主も、長浜の本城には内密にしているみたいよ。大体、今日のご視察も、それと関わりがあるとかないとか……」

水杖がそこまで言った時だった。不意に二の丸の方でけたたましく板鐘が鳴り出したかと思うと、

「大変だ！ お書物庫がやられたぞおッ！」

「火事だ！ ボヤが出てるッ！ 早く消し止めろ！」

「急げ！ 火元はお書物庫、お書物庫だぁッ！」

のどかな春の空気を引き裂くように、次々とひきつった叫び声が上がった。

建物から沸き出すようにして、城兵たちがあふれ出てくる。その姿は次々と、二の丸目がけて駆け出していく。

お書物庫！

「月江様……！」

私は顔色を変えて立ち上がった。ぱっと駆けだす。水杖があわてて背後で叫ぶ声が聞こえた。

押し寄せる天槻兵や、留守居の家臣の集団に揉まれるようにして走り、二の丸の狭い階段を殆どよつばいになって私は這い上がった。現場では、すでに大きな人の輪が出来ていた。

「月江様！」

思わず叫ぶ。人の輪の中に、がっくりと腰を落とす白髪頭が見えた。もう一度叫ぶと、のろのろと、その顔が上がった。

「朝芽どのか…」

人垣が割れて、駆け寄った私を通してくれた。私は周囲に礼を述べつつ、小柄な老人の元に走り寄った。

「月江様、お怪我は！」

「わしは何ともないよ……だが、お書物庫がこのざまじゃ。御城主様に何と申し開きできよう」

老兵の指さす方を見て私は息をのんだ。

水浸しの、黒く焼け焦げたお廊下の板木。そしてめちやくちやにたたき壊されたお書物庫の扉。

見るまでもなく、中の惨状は容易に想像がつく。

「ごっそりやられたよ。地理と名のつく書物は全部じゃ。まったく、非道いことをする！どこまで損ねれば気が済むんじゃ…」

月江老は、情けなさそうにばやき続けた。

お書物庫のボヤは、結局廊下の一部を焼いただけで済んだようだ。幸か不幸か、番役二人の交代時で、書物庫の前は一時無人になっていたと言う。月江老はかなりしよ<sup>つきえ</sup>げていたが、何事もなかったのは幸いと、私は胸をなでおろしたのだった。

天槻のお書物庫は、普段から開放的だったこともあり、やがて帰城したご城主様により、失われた書籍については、番役二人にお咎めなしとの裁可が、即日下った。

しかし、曲者の侵入をやすやすと許した事態を重く見た重臣たちは、宿直番を増やし、翌終日かけて修繕されたお書物庫の警備も、

あわせて嚴重に行うことになった。月江老も、お役を外されることはなく、我こそ曲者を仕留めんと、より精勤に励んでいるようだ。

ボヤ騒ぎから三日ほどたったある夜、りようすけ凌介様にも宿直のお役が回ってきた。下城の鐘が鳴った後、改めて夜のお勤めが始まる。この日は私も、寝ずの番を心得て、凌介様と共に本丸の詰所つめしょに控えていた。

詰所は部屋の隅々にまで燭台がとり、昼間のように明るかった。外堀や内庭、泉水の中にまでかがり火が焚かれ、厳めしい鎧に身を固めた歩哨ほしやうが直立している。ぱちぱちと松明のはぜる音が、詰所の奥にまで聞こえてくる。まるで戦時のように、天槻城はその全貌を赤々と、闇の中に浮かび上がらせていた。

凌介様は、同じ宿直の隊長たちとしばらく明日の修練について談笑していた。途中で真咲様まゆみが酒樽一つを抱えて登場し、謹厳な寝ずの番がささやかな酒宴と化した。やがて夜も更け、彼らが手枕でごろりと畳に転がり出すと、凌介様は黙って立ちあがり、私の方に戻ってきた。

「朝芽あさめ、遅くまでつき合わせちゃったな。俺が起きているから、少し休めよ」

私のすぐ側にしゃがみこみ、凌介様は低い声でいたわるように言った。

「大丈夫です、お気づかいくださいませんよう」

私は眠っている人たちを起こさないよう、小声で答えた。向こうでは、真咲様が、派手な薄衣をかぶって大の字になっているのが見える。殆どの人々が横になってはいたが、お役目を意識してか、深くは眠っていないようだ。誰かが起きていれば、問題はないのだろう。

凌介様がふと、膝の上に手を伸ばす。そこには、今まで読んでいた本が乗っていた。



「辺境外史……か。」

「ご存知でしたか」

尋ねると、黒々とした瞳が笑みを含んで私を見た。思わず頬が赤くなり、ちよつと目を伏せる。

「昔、な。国境の城に真咲まつきといた頃だ。……ん？ この絵図は……」  
手を止めたのは、杵築村全図きつきむらの頁だった。どきん、と心臓が一つ鳴る。

凌介様はしばらくその見開きを見つめていたが、

「もう忘れたな。ずいぶん前の話だ」

不意に本から手を離した。

軽快に立ち上がる。見上げた顔の前に、大きな掌が差し込まれた。  
「少し歩くか。夜の天守閣なんて、中々上がれないしさ」

凌介様は、そのまま私の手をつかみ、返事も待たずに引き起こすと、

「影、起きとけ。俺は見回りに行く」

容赦なく、友人の寝姿を蹴っ飛ばした。

それは文字通りの見回りで、凌介様は本丸中の溜間や詰所、お廊下を回り、更には庭園や周囲のやぐらにまで足を伸ばした。私もそれに従って、消えた燭台に火をともしたり、明かりの届かない闇の中に、目を凝らしたり、とあわただしく動き回った。

どれくらい部屋を回っただろうか。気がつくと私は、お城のかなり高いところにまで上がって来ていた。目の前には、天守に続く木段が見える。本丸の最上階。旗女がそのような高みに上がるのは、と私は一瞬尻込みしたが、凌介様は、心配ないと言ってずんずん階段を上ってしまった。ご城主様は普段は本丸の裏手のお屋敷内におられるため、天守には子ねの刻を過ぎた深更に限り、“怪異を払う”という名目で、宿直の者も上がることを許されているそうだ。勿体ない事ではあったが、主にお咎めとががないのであれば、と私もそつと階段に足を乗せた。

生まれて初めて上がった本丸の天守は、四方に窓が開き、夜風が穏やかに吹きこんでいた。家具調度の類は一つもなく、ただのがらんとした溜場に見える。燭台は吹き込む風で消されていたが、外からの明かりで、辺りの様子はよく解った。

窓の向こうに夜空が見える。惹かれるように大窓から外へと踏み出した私は、思わず感嘆の声を上げた。

「わあ……綺麗」

頭上は満天の星空だった。はるか下方には御城下の明かりがぼつぼつとみられ、その先には暗い平野が広がっていた。平野の彼方には、山々が夜の闇よりも深く沈んで連なっている。月はとくに西の山に沈み、空を渡るホトトギスが、時折鋭い声を上げる。山から吹く風は生温かく、どこか初夏のにおいもはらんでいた。

眼下には、渡り廊下の屋根が東西に続き、その先には、二の丸の大屋根が見えた。つづらに折れた複雑な通し道。随所に門が設けられ、まるで巨大な迷路のよう。少し目線を上げれば、三の丸とその外郭が、本丸の敷地を広く取り囲んでいるのが良く解る。とは言え、天槻城は、それほど大きな城ではない。戦略的には、長浜本城の、それこそ二の丸のような位置に当たる。便宜上本丸、二の丸と呼び分けてはいるが、上から見れば、それらの屋根はすべて間近に連なっている。

私はしばし無言で、これらの景色に見入っていた。様々な思いが胸をよぎる。半月ほど前までは奥山の泉に通っていたのに、それがもう遙か昔のように思い返されるのが不思議だった。

ずっと、私の横に人影が立った。

振り向くと、すぐ傍らに凌介様が立っている。

驚いて脇へ退こうとすると、「やめろよ」と笑いながら制された。そのまま並んで立ち、無言で同じ景色を眺める。緊張と、高ぶる気持がないまぜになり、私の胸は鳴りっぱなしだった。

改めて間近で見た凌介様は、私よりかなり上背があった。真咲様が大柄なので、そのそばにいと小さく見えていたのだが、実際は、引き締まった厚い胸板にがっしりとした肩幅の、すらりとたくましい長身だった。

大きな掌。長く美しい指。その手を無造作に欄干に掛け、凌介様はまっすぐ前方の闇を見ていた。整った横顔に、栗色の髪が影を落とす。高い鼻梁。わずかに伏せられた長い睫毛。闇の中にうかんだ白い顔は、何か物思いにふけている美しい彫像のようだった。

きれい……

おもわず見とれた私の脳裏に、ふと、先日の水杖の言葉がよみがえった。

“奥方になれるなんて、おもうはずもないけれど”

いきなり、高鳴っていた胸を冷たい手でぎゅっとつかまれた気がした。

こんなときに、なんでそんなことを思い出すの、と自分が恨めしくなったが、一度浮かんだ思いはたやすく消えてくれない。

“それは、奥方の仕事だ”

解ってはいた。どれだけ目をかけてもらえても、お旗女にはどうしても超えられない壁があると言うことは。

夜闇は人の心を怪しくかき乱す。

解ってはいるけれど。

どうして、こんなに胸が痛いのだろう。

「……この十日間。」

澀んだ思考を打ち払うように、ふいに真横で、声がした。私は、はじかれたように顔を上げた。まるで心を見透かされたような気がして、途端に頬が熱くなる。しかし、そんなことがあるはずもなく、

凌介様は前を見たまま、いつも通りの、静かな声で後を続けた。

「期待以上だった。正直、音を上げるかと思ってたんだ。試していたわけじゃないけど、思ってた以上の働きだった」

その言葉は何よりも嬉しく私の心に染み渡った。ここ数日の思いがどっと胸によみがえり、私はあわてて下を向いた。先ほどまでの心の痛みが、見る間に消え去っていく。そうだわ。どうしてあんな余分なことを考えたのかしら。

「凌介様が、教えて下さったおかげです」

うつむいたまま、小さく答える。

「朝芽」

不意に、名を呼ばれた。恐る恐る顔を上げると、凌介様がこちらを向いていた。長い指がずっと伸びて、私の頬に触れる。

「また泣いてるって」

「泣いて……いません!」

あわてて顔をそむける。心臓が大きく跳ね上がる。

「いいさ。泣いても笑っても、お前は一人前のお旗女だ」

凌介様は明るく言って、欄干に背を持たせかけ、夜空を振り仰いだ。

私はこぼれそうになる涙を、袖口で拭った。

目元に温かい指の感触が、いつまでも残っていた。

東の空が明るみ始めた。はじめは星の輝きに紛れていたが、はるか遠くの山上の空が、次第に夜の闇を押し始める。

「そろそろ行こうか。」

凌介様が、欄干から体を離れたその時……

空気の中に何か違和感を感じて、私は立ち止まった。

まだ闇が澱む二の丸の大屋根の上。お書物庫の出窓の近くに、何か黒いものが動いたのだ。

「朝芽、どうした」

「あそこに、なにか……」

凌介様の反応は早かった。手摺の上に身を乗り出し、私が指す方向にぐっと目を凝らす。不意に

「人影が二つ。お書物庫の上」

呟くと彼はパッと欄干から飛び降りた。

「お前は詰所へ！」

言い捨てるや、燕のように身をひるがえすと、すさまじい速さで天守から走り出ていく。

あわてて続こうとした時、視界の隅に光が走った。思わず振り向く。

彼方の屋根の上で、影の一つが手にした明かりをきらきらと振っていた。確かに、黒装束の男が二人見える。それにこたえて、城の西方の山の中腹に、小さく合図の火が点った。二つ、三つ。くるくると回る。そしてすぐに消えた。それはどこか幻想的な光景だった。思わず私は、見とれていた。

城中が騒然となったのは、その直後のことだった。

「曲者！」

「出たぞ！ 盗人だ！」

喚き声が城のあちこちからあふれだす。バタバタと侍たちが渡り廊下を走っていく。

内庭でも、見る間にお書物庫目がけて足輕兵たちが押し寄せてきた。矢がパラパラと射かけられる。屋根の上の影の一つが、もんどりうって転がり落ち、私は思わず息をのんだ。

残された影が、素早く屋根を回って視界から消える。仲間を助ける気はなさそうだ。

屋根から落ちた曲者に、兵士たちが重なるように組みつき、取り押さえたのが解った。

〈続く〉

(3)

曲者の正体は、最近、国内を荒らしていた大きな山賊の一味だと解った。首領に命じられて天槻城あまつぎじょうから、地理に關した本を持ち出していたらしい。

「目的は解らねえ。ただ、辺境の地図が要るんだと言われ、それらしいのを片っ端から盗んだだけだ。」

捕えられた男は、それ以上のことは知らなかった。首領の顔さえも解らないと言う。

逃げたもう一人の男についても、

「初めて組んだが、同じ山賊の下っ端だと思う。殆ど言葉も交わさなかった」

と冷めた口調で吐いたそうだ。

結局、あれだけ労を費やしたにもかかわらず、目的の本は得られなかったらしい。命令が、“地理の本”だけでは、無理もない。

山賊の首領は、ふちがみげんき 湧上幻奇と名乗る極悪非道の妖漢で、隣国の息のかかった大忍者とも、千年も生きる妖術使いだともいわれている。根拠のない噂ではあったが、それはこの男の不気味な肖像として、今も巷に語られていた。

盗人はすぐに、長浜本城に送られることになった。根城や目的、その規模など、聞きたいことが山のようにあるのだという。

曲者の正体や目的が明らかになったことで、この件はひとまずの落着を見せた。山賊が何のために地図を欲しがるのかは解らなかったが、それまでお城を覆っていた得体の知れない暗雲が、少しだけ晴れたのは明らかだった。

凌介様りょうすけと真咲様まさきは、引き続き中庭警護を命じられ、調練の合間によく本丸を駆けまわっていたが、その後怪しい影の報告もなく、日々は穏やかに三日が過ぎた。

三日後、私は読み終えた辺境外史を携えて、再びお書物庫を訪れた。真新しい扉の前で月江老つきえが迎えてくれた。

「やあ、来たね。」

「長い間お借りしまして」

「山賊が忍んでいたんじゃないかと？ まったく、こんなボロ書庫にどんなお宝が眠っていたのやら」

首を振りながら、月江老が鍵を開けてくれる。

いつものように中に入り、私は“へんきょうがし辺境外史”を棚に戻した。

ふと窓の外を見ると、凌介様がちょうど中庭で長柄隊を調練しているのが見えた。よく通る大声がここまで聞こえる。眼下の動きは一条も乱れず、軍列が向きを変えるたびに、槍の穂先みなづえがきらきらと輝く。反対側では、真咲様が指揮をしている。水杖の姿は、今は見えない。

「どうしたんじゃない」

月江老の声に、我に返った私は、あわてて窓から離れた。

「えらく深刻な顔をして見ておったぞ」

窓辺に立った月江老は、汗だくになって指揮している凌介様の姿を目にとめたようだ。その目が、ふうむ？ と言うように私に戻る。頬が熱くなるのが解った。

「良い若武者ぶりではないか」

「いえ、私は…」

心臓が高鳴る。見られてしまった！ あまりの恥ずかしさに、その場から駆け出したい衝動に駆られる。

「違うのか？ あさめ朝芽殿の視線の先は、すぐ解ったがな」

「私は……」



逃げることもかなわず、真っ赤になってうつむく。今にも消えそうになる声を、ようやく絞り出した。

「私は、お旗女でございます」

「それがなんじゃ」

月江老の声は、一抹の厳しさ<sup>いちまつ</sup>を帯びていた。打たれたように私は顔を上げた。

「己<sup>おのれ</sup>の分はわきまえております。私はどうあっても」

奥方にはなれません！ 寸前で、最後の言葉を飲み込む。動揺が走る。

私は何を言おうとしたの！？ なぜ、こんなことを考えるの！

「絆<sup>しやくねつ</sup>の深さに、身分の区別は必要か」

灼熱の鉄を打ちこまれたように、私の心に衝撃が走った。思わず目の前を見つめると、そこには、常と変わらぬ風体の月江老が立っていた。しかしその視線は、射抜くように厳しく、私を見つめていた。

部屋の空気がピン！と張り詰める。

沈黙……。

しかし、その沈黙は、私の心を大きく包み込んでいた。

絆の深さに、身分はない。

そう。

心をこめてお仕えすることが、私の決意ではなかったか。

『俺の部下は、俺が守る』

ならば私は、日々の勤めでそれに答えねばならぬのではないか。

ただ一心に責務を果たすと決めた気持ちを、立場付ける必要なんてない。

垂れこめていた暗雲が、一度に晴れ渡ったような……。

どうして、こんな簡単なことに気付かなかったのだろう。

「朝芽<sup>あさめ</sup>どの」

やがて、月江老の優しい声が聞こえた。

「苦しまずとも良い。唯<sup>ただ</sup>、己の心に正直であれ。」

さすれば、道は開く。

最後の言葉は、風がささやいたようだった。聞き返す間もなく、月江老の姿が、扉の向こうへと去っていくのが見えた。空耳だったのかも知れない。しかしその声は、不思議な威厳と共にいつまでも私の心に響いていた。

月江老がお廊下へと戻って言った後も、私は書棚の影で一人、立ち尽くしていた。

自分が採るべき道が開けたような、そんな心地よい余韻に浸っていたのだと思う。

このわずかな時間が、その後の災厄を招くとも知らずに……。

「修繕殿が呼びじゃと？ やれやれ、ではここを頼むぞ」

廊下で大きな声がした。上役に呼ばれたらしい月江老が立ち去っていく。

その足音がお廊下の彼方に消えていったと思った刹那、お書物庫の扉が、ガタリ、と鳴った。

スーッと、開く。誰かが入ってくる気配。

空気が、不意に澱んだような気がした。それは直感のようなものではあったが、私は反射的に書棚の影に縮こまった。

目の前に、人影が立った。目つきの鋭い、若い足軽である。確か、月江様と同じこのお書物庫のお番役を務めていた……。

足軽は私に気づかず、目の前のお棚を目を凝らすようにして探っている。

やがて

「あった」

小さくつぶやくと、一冊の本が手に取られるのが見えた。

辺境外史。

私がつい先刻、そこに戻したものだ。

「ついに……見つけたぜ」

にやりとつぶやく。そこに浮かんだ冷酷な笑みに、私は思わず身

をすくめた。

この人はただの足軽ではない。

私の脳裏に、先日の光景が鮮やかによみがえった。

お書物庫の屋根に張り付いていた影。一人は捕えたが、もう一人は逃げ去った。

もし、もしも。

あの逃げた一人が、この男であったのなら。

誰にも知られず、何度も荒らされたと言うお書物庫。もしそのお番役の一人が一役買っていたのだとしたら、これ以上やりすい“仕事”はないだろう。

謎の足軽が、私の推測を裏付けるような行動に出たのはその時だった。

懷に本をしまうと、代わりに取りだした小さな手鏡。西側の窓に近づくと、彼はそれを表に向けてピカリ、ピカリと閃かせたのだ。

合図にこたえて彼方から、明らかに手鏡のではない強い光が走る。それは一瞬のことだったが、私の記憶を刺激するには十分だった。

光が答えたのは、三日前の夜、お天守から見た西の山の中腹だった。

やがて足軽は、私に気づかないままお廊下へと出て行った。このまま何食わぬ顔でお勤めを終え、懷の本を抱えたまま仲間の元に戻るのだろうか。

城内では、誰も気づいていない。たった今それを目撃した私以外に、事を見破る人もいないだろう。お書物庫の本が、今日一冊無くなったからと言って、誰が先日までの派手な盗みと結び付けるだろうか。

私はしばし考えた。すぐに凌介様に、と思ったが、お書物庫の扉にはあの足軽が番をしている。今ここで、姿を見られるわけにはいかない。しかし月江様が戻ってからでは、捕える機会を失うかもしれない。ちょっと所用で、と、月江様と入れ替わりに外に逃れれば

いいわけだから。

ふと、窓に目がいった。

電撃のようにひらめきが走る。

調練！

そうだ。ここから合図を送ればいい。凌介様はすぐ下にいる。きつと、解って下さるだろう。

私は窓に駆け寄った。ちょうど、見下ろした場所を凌介様と真咲様が連れ立って、長屋の方へ戻っていくところだった。調練を終えたらしい。今は長屋で待機していなければならないのに……と、お旗女としての責任感がうずいたが、それどころじゃない、と気を取り直した。そのまま窓から大きく身を乗り出し、必死で手を振る。

「なんじゃあ？」

真咲様が先に気付いた。続いて凌介様も上を向く。危ないところだった。閃くのがもう少し遅ければ、お二人は立ち去ってしまっていたのだ。

私は必死でお書物庫の中を指さした。扉、扉。続いて矢を射かけられた曲者の真似<sup>はため</sup>。

傍目にはとても滑稽なものだったらしく、真咲様が吹き出すのが見えたが、凌介様はじつと私の動きを見ていた。と、不意に彼の目が大きく見開かれた。

通じたのだ！

すぐに行く。お前はそこを出ろ。

凌介様が手で合図する。ああん？　といぶかしげに真咲様がそれを見ている。

えっ、窓から！？

どきっと、身を引く。凌介様の合図は変わらない。

窓の外に隠れている！

窓の外には小さな張り出しがあった。そこにしゃがめば、中から身を乗り出して覗きこまない限り、人がいるとは解らないだろう。得心した私が、窓から出ようとした時だった。

いきなり背後から、顔に布を巻きつけられた。

一度に視界が黒くなる。鼻も口も塞がれて息が出来ない。

アッと思う間もなく、胸に太い腕が回される。

「朝芽っ！」

凌介様の叫び声を後ろに、私はお書物庫に引きずり込まれた。

冷たい床に体が投げ出された後も、自分の身に何が起こったのか分からず、私は無我夢中で顔に巻かれた布を外そうと手をかけた。その手が腕ごとぐっとねじあげられる。目元の布が少しずれ、周りの情景が飛び込んできた。

私はお書物庫の床に抑えつけられていた。そして胸の上には、ぎらぎらと光ったあの若い足軽の姿。その口元が、にやりとゆがんだ。

「まさか、人がいたとは」

腕が折れるほどに締めあげられ、私は思わず悲鳴を上げた。しかしすぐに黒布が口に押し込まれ、くぐもったうめき声に変わる。

もがく私を軽々と抑えつけた足軽は、感情のない、ぞっとするような目で私を見下ろしながら、腰の短刀を引きぬいた。真っ赤な蜘蛛の彫り物のある、足軽にはおよそ不似合いな刀だ。しかし、その斬れ味は間違いなく鋭いのだろう。

「殺すには惜しい、いい女だが、お前の骸で伝えてやろう。長浜国は、強大な敵を懷に抱えている、と。」

布ごと口をふさいでいた冷たい手が、顎から喉元にすっと滑り、私は思わず顔をそむけた。

「天守に生首をさらす。女の首を刈るのは大仕事だ。クク……脂が多いからなあ。だが、お前の主がここまで上がって来るまでに、十分時間はあるだろう」

私の心に絶望が走る。お城は外敵に攻められた時のために何重もの複雑な道が敷かれている。曲がりくねった通し道。階段。御門。見下ろせば真下でも、確かに、凌介様がいた中庭からこのお書物庫までは、かなり遠い。

紅玉があれば…！

絶望の脳裏を禁断の言葉がかすめた。あれさえあれば、この窮地を脱する事が出来る。しかし、紅玉は、今は長屋のつづらの中だった。観滝社殿の東門で禁を犯しかけて以来、私は二度と同じ過ちを犯すまい、と敢えて肌から離れたのだ。それを今、こんな形で後悔しようとは。

しかし、すぐに私は自分を恥じた。どんな窮地でも、あの力に頼ろうとするなんて……！

私は、抵抗をやめた。全身から力を抜く。

その一瞬、足軽は怪訝な顔になったが、すぐににやりと酷薄な笑みを浮かべた。

「女にしては珍しい諦めの良さだな。……いい子だ。その方が痛くない」

相手の力がふっと緩んだその瞬間！

私は全力で胸の上の体をはねのけた。転がりながら跳ね起きて、口の中の布をむしり取ると扉に向かって走りだす。引き手をつかんだ。思いきり引き開ける。ガッン！ と両手に抵抗がはしった。扉は、びくともしない。ハッと手元を見ると、内側からカギがかけられている。

しまった、と思ったその瞬間、私はすさまじい勢いで後方に引きもどされた。

髪をつかまれ、のけぞった首に氷のような刃がピタリと当たる。

「さあ……時間だ」

耳元で、笑いを含んだ声がささやく。

寒気が走った。

足軽は、その格好のまま最初の窓のそばに私を引きずっていくと、ギリリと短刀の刃先を返した。

「油断したよ……クク……だが数秒じゃ運命は変わらない。」  
今度こそ殺される！

すさまじい恐怖が押し寄せてきて、私は思わず絶叫した。

「凌介様！ 助けて……！」

その時いきなり閃光せんこうが走った。それはとっさにのけぞった足軽の胸元を、間一髪でかすめ去った。窓から飛び込んできた黄金色の影が、飛燕ひえんのように抜き打ちを放ったのだ。

足軽が飛び退く。思わずへたりこんだ私の前に立ちはだかった胴巻姿の凌介様が、腰を低く落とし、短刀を構える。

「運命を変えるには、数秒あれば十分だ！」

怒気を含んだ鋭い声で、凌介様は叫んだ。

「俺のお旗女に手を出すな！」

狭いお書物庫の中で、すさまじい闘いが展開された。

間髪をいれず、凌介様は猛烈な速度で立て続けに斬りかかった。

あの足軽が、かろうじて受け返している。

ドカン！ バシヤッ！

重い体がぶつかるたびに、書物が吹っ飛び、木棚が碎ける。

バシイッ！

凌介様の渾身こんしんの一撃。それは蜘蛛の小刀を粉微塵に碎いた。すさまじい破壊力だ。

足軽が後方にトンボを切って、次の刃をすんにかわす。間髪をいれず凌介様は相手の懐ふところへ飛び込んだ。踏み切りざまに回し蹴りを放つ。ぐう！ とうめいて足軽が吹っ飛ばされる。まるで光が走っ

ているようだ。速い。息もつかさぬ凌介様の攻撃が、謎の足軽を追い詰めていく。

しかし足軽も相当な使い手だった。吹っ飛ばされた先の壁を蹴り、とつさに懷から取り出した握り刃やいばを逆手に構え、空中から凌介様に飛びかかった。

ガッキーン！

金属のぶつかり合うすさまじい音がして、バツと、影が左右に飛び分かれる。

勝負はほぼ五分と五分だ。語ると長いが、実はほんの数秒の出来事である。

「朝芽！ 逃げろ！」

相手の繰り出した必殺の一撃を、渾身こんしんの力で受け止めながら凌介様が叫んだ。私は必死で頷くと、押し合う二人の横をすり抜け扉の内鍵を引き抜いた。足軽が私に蹴りを飛ばす。凶悪な一撃が私の胸を直撃しようとした瞬間、凌介様が横つとびに走り込み、逆回転に回し蹴りを放って、寸前でそれを受け止めた。

ヴァキイ……ッ！

吹っ飛ばされた足軽が、木棚に叩きつけられる。

「早く出ろ！」

短刀を構えながら必死の形相で凌介様が叫ぶ。扉を引き開けた私は、不意にすさまじい悪寒を感じて振り返った。

足軽の様子が変わっていた。

棚に叩きつけられたままの姿勢で、顔だけを上げてこちらをじっと見ている。その目が不意に赤く光った。

来る！

私の中で何かが絶叫した。それはおぞましいまでの感覚だった。足軽は、にやりと笑うと両手を胸の前に掲げた。その指先から、赤黒い妖気がすさまじい勢いであふれ出すのが、私の目に……おそら



く私の眼だけにはつきり写った。

「危ない！」

叫んだ私はとっさに凌介様に飛びついた。妖気が爆発する。それは猛烈な風の塊となって、扉をぶち破り、私たちをお廊下の端まで吹き飛ばした！

血がしぶく。二の腕がざっくりと裂けていた。あまりの衝撃に足がガクガクして立てなかった。お書物庫から、笑みを凍りつかせた恐ろしい形相の足軽が出てきた。それはすでに人の表情ではない。グイッと腕を掴まれた。凌介様がよろめきながら、それでもすさまじい力で私を引き起こす。

「俺の後ろへ！」

片膝をつきながら、それでも凌介様は短刀を構えた。私は激しく首を振ると

「逃げて凌介様！ 私たちではかないません！」

「何だって！？」

「あれは人間ではありません！ 私には解ります。あれは！」

私と同じ世界の……！

辺りが白い閃光に包まれたのは、その時だった。きらめくような光の帯がまき散らされ、爆発する。

凌介様が私の体をつかむ。そのままぐっと胸元に引き寄せられた。地面につっぷす。瞬時に視界が真っ暗になり、耳の奥に、ただ温かい鼓動だけが響いてきた。

ああ……これは、凌介様の心の臓の……

その時、聞き覚えのある声が、凜と辺りに響き渡った。

「お城を騒がす佞人よ。覚悟をいたせ」

私はうずくまっていた腕の中から、おそろおそろ顔を上げた。すぐ上には、愕然と目を見開いて固まっている、血しぶきにまみれた凌介様の横顔が見えた。

目の前のお廊下では、まるで蜘蛛の糸のように伸びた白い網に、足軽が絡めとられてもがいていた。

駆けつけた真咲様とその隊下が、わあわあ騒ぎながら、それを遠巻きに取り囲んでいる。

そして、押し寄せた天槻兵の輪の中央で、唯一人その拡散している網の根元をしっかりと握っていたのは……

ほかならぬ月江老だったのである！

「油断したわ、日和爺。ひよりじい 全く害のない同役だと思っていたに」

糸に巻かれたまま、足軽が、どすの効いた声で笑った。

「そなたを同輩と思うた事はない。山賊頭、ふちがみげんき 洵上幻奇！」

老人の声はまるで一騎打ちに挑むいにしえ武将のように、朗々とあたりに響き渡った。

どよめきが走る。

凌介様も驚いたようだ。

洵上 幻奇……！

泣く子も黙る妖術使い。それこそ、この度の騒動を部下に命じた張本人の名ではなかったか。それがまさか、自ら番役として城内にもぐりこんでいたとは……

「ククク……おぬしこそ、ただの爺いではなかったわけか。」

足軽……洵上幻奇と呼ばれた妖術使いは、面白そうに肩をゆすつた。

「我が名は妙法院少憬。みょうほういんしょうけい 長浜忍軍、妙法院党の頭領じゃ。土岐定照様のご下命を受け、この地に潜んでおった」

どよめきがはしる。

私は衝撃を隠せなかった。あの日向のようににこやかな老人が、まさか本城屈指の忍術軍団の頭領だったとは……！ お書物庫で聞いた、清冽な声音せいれつがよみがえる。そうだったのか。あの声は……厳しい任務に就く大重臣が、一お旗女いちの心得違いを、親身になって叱ってくれた声……。

「同番役になったも何かの縁じゃ。おぬしには処刑場まで付きおうてやろう」

老頭領が、淡々と答える。

「処刑、か。ククク……。だが、それは先の楽しみに取っておけ」  
うつむいていた足軽がくいつと顔を上げた。その目が再び赤く光る。

「それまで寿命が持てばだが」

「いかん！」

月江老がグイッと白網を引いた。しかし一瞬早く、すさまじい叫び声がとどろきわたり、辺りが一瞬で真っ黒になった。巨大な鳥が次々と窓から踊りこんできた。すさまじい羽風。悲鳴を上げ混乱する兵士たちを尻目に、握り刃で網を切った洩上幻奇は、ひときわ大きな鳥の足をつかむと、窓から外へと飛び出していった。

恐ろしい刻は終わった。

山賊頭は、妖鳥とともに姿を消し、後には再び破壊されたお書物庫と立ち騒ぐ足軽たち。

あまりの不可思議な出来事の連続に、いつもの軽口を忘れ呆然としている真咲様。

そして、傷だらけの凌介様……。

凌介様は、すべてが終わった瞬間、崩れるように膝をついた。あわてて駆け寄り、肩を支える。真咲様が飛んできた。

「凌介！ 大丈夫かい！」

「影……」

凌介様が、肩で息をつきながら、のろのろと顔を上げる。それから二人は、示し合わせたように私の方を振り向いた。

「お前、立派に守ったじゃねえか。」

真咲様が、妙に嬉しそうな声で言った。

「そうすると言ったろ」

ぐったりとほほ笑んだ凌介様は、私の腕をつかむとぐっと引きよせた。

「あんな外道<sup>げどう</sup>に、負けてたまるかって」

「朝芽」

月江老……今では本城忍軍の長である老頭領様が、私の名を呼んだ。真咲様と凌介様があわてて平伏する。私も一歩下がって、低く頭を下げた。

「危ない目に会わせたの。わしがもう少し早く駆けつけてやればよかった。だが、」

老人は、凌介様の血にまみれた黄金色の胴巻を見つめ、

「……良き主を持ったな。これから励めよ」

「はい」

私は泣きそうになるのをこらえながら顔を上げた。月江老の変わらぬ笑みがそこにあった。

「しかし……妙法院様」

私の前で、凌介様が、沈んだ声で言った。

「朝芽が言うには、大切なお書物が一つ奪われたとのこと。力至らず、申し訳次第もござりませぬ。」

「なんの。謝ることはない」

一度言葉を切った月江老は、にやりと笑うと

「奪われたは“辺境外史”であろう。あれは、偽物じゃよ。」

「えっ？」

「本物はとうに長浜の本城に送ったわ。わしの情報網も、そう捨てたものじゃない。あれは、わしが書き写したものじゃ。朝芽に貸した時からすでに、わしの網は張られておったのじゃよ」

まさか同番役に化けていたとは思ひもしなかったがなと言って、月江老は豪快に笑った。

「偽物……月江様が書かれた……」

私は混乱する頭から、かろうじて言葉を絞り出した。

「では、あの、杵築村全図は……」

「ああ、あれはわしが数年前に訪れた村でな。原本にはなかったものだが、ひときわ心に残っていたので、新たに書き足してみたのだよ。杵築村五郷は、面白い村でな。今も生きた伝説があつてな。」

「伝説……?」

不思議そうに問い返した凌介様に、月江老は、秘密を語る口調で、おごそかに言った。

「鬼が、いたのだよ」

これは、後に真咲様から聞いた話だ。

あの時、私が窓から消えたのを見て、凌介様はとっさに長屋の柱に飛びついたのだそうだ。

そのまま屋根から二の丸へと凄まじい速さで飛び移り、ほとんど直登でお書物庫まで駆け上がった。普通に階段やお廊下を回っていたら、おそらく私の命はなかっただろう。

「元々素早いヤツだとは思っていたが、あれほど速いとは思わなかった。あんなに血相を変えた凌介は、初めて見たぜ」

真咲様は信じられないと言うように首を振った。

(4)

斜陽が差す日暮れの長屋で、私は凌介様の傷のお手当てをしていた。

あれから数刻が過ぎていた。天守では、妙法院様を囲んでご城主様や重臣の歴々が、山賊討伐について議論を戦わせているようだ。

凌介様の体には、大きな怪我こそなかったものの、それはもう数え切れないほど斬り立てられた刀痕があり、鬨いのすさまじさを物語っていた。

凌介様は無言。私も無言だった。

傷口を清水でそそぎ、包帯を巻いていく。それは奇妙に静かで、穏やかなひとときだった。

一通りのお手当が終わった時、凌介様が、ポツリと呟いた。

「……朝芽、すまなかったな。調練に呼ばず、お前を一人にしていた為に、恐ろしい目に合わせちゃった。俺が守ると誓ったのに。」  
夕日に照らされた横顔が、沈んでいた。しなやかな体軀は少しくつむき加減に、栗色の髪がその表情を隠している。

私は、盥たらひを置いて、その横に端坐たんざした。

「いいえ」

まっすぐ、凌介様を見つめる。ゆつくりとこちらを見上げた寂しげな瞳に、私はにっこりとほほ笑んだ。

「全力で、守っていただきました。おかげで、こうやってまだ、お仕え出来ます」

「……そうか」

「来て下さって、嬉しかった。私は幸せです。」

私は、心を込めてそう言った。

凌介様の口元にも、笑みが浮かんた。そのまま視線を、彼方に向けて。金色の雲が輝く西の空。

「疲れたな……。今夜は共に飲もうか」

何かを吹っ切るように、不意に立ち上がった凌介様は、私の手をぐっと握ると、夕日に向かって歩き出した。

〈続く〉

## 第四章 不幸のお守り・前編

### (1)

夜明けの鐘が、日ごとに早く鳴るようになった。

まだ暗いうちに起きて東の彼方を眺めれば、春とは違った力強さで、空が明るんで来るのが解る。空気はどこか湿り気を含んで温かく、やがて来る梅雨の季節を予感させる。長浜国は、新しい夏に入ろうとしていた。

その日は朝からよく晴れていた。日差しが強く、立っているだけで汗ばみそうな陽気だった。

私は通用門で、出入りの鍛冶職人と調練で傷んだ直槍すぐやりの打ち直しについて話しあっていた。早朝の調練を終えたばかりの天槻城あまつきじょうはあわただしかったが、私が今いる、日常小者たちが使う黒塗りの通用門は、比較的静かだった。本丸のお台所から、朝餉のおいしそうなにおいが漂ってきている。職人さんのおながぐうと鳴って、思わず二人で笑い出す。そんな話し合いの中、気になっていた値段交渉あさめも、

「朝芽あさめさんの顔を立てるよ」

と、お腹の虫のお陰で親しくなった職人さんの好意で、無事終わることができた。私は喜んで礼を述べた。

鍛冶屋が帰ると、私は受け取った預かり証文を勘定役かんじょうやくに渡すため、本丸雑仕所に続く急峻な階段を上って行った。かなりおまけしてもらったのが嬉しくて、足取りも自然と軽くなった。

雑仕所への道は、天槻城の中で一番きつい心臓破りの坂道で、左

には高くそびえた石垣の壁、反対側には深い雑木林が続いている。  
階段の途中で、ふと、私は足をとめた。

どこかで、弱々しい声が聞こえたような気がしたのだ。

「……どの、そこ行くお女中どの」

間違いない。右手の雑木林の中だ。誰かが私を呼んでいる……？  
私は、おそろおそろ林の中を覗き込んだ。目の前は少しえぐれた  
ような溝になっており、一段低い地面を下草が一面に覆っている。  
そのシダやコケで埋もれた土中に、黒い具足がもぞもぞと動いた。

「怪しい者ではない。わしは、高砂備中たかさこびっちゅうと申すお城の将で……」

「備中様！」

叫んだ私は慌てて駆け寄った。

それは、あまりによく知っている名前だった。

正式には、高砂備中守長盛とおっしゃる重鎮で、長柄足輕隊大隊  
長……りようすけ凌介様や真咲様まさきをもう一段上で束ねる、天槻城の將軍の一人  
である。私も何度かお目にかかったことがあったが、五十路を超え  
た磊落らいらくな武人で、お酒が入るとやたらと力比べをしたがる闊達かつたつなお  
人だ。

「おう、そなたは出石いづしのお旗女殿か」

あちらも、私のことを覚えていてくれたようだ。

「いかがなされたのですか」

駆け寄った私に、備中様は痛みに歪んだ汗まみれの顔で、拝むよ  
うに言った。

「すまんが、そなたの主を呼んできてくれんか……。崖から落ちて  
な、腰が……わしの腰が、……」

そこは、階段から少し下がった雑木林の入口に過ぎなかったが、  
お気の毒な備中様は、まるで険しい崖から落ちたような心持ちがし  
ていたに違いない。おそらくかなりの勢いで転げ落ちたのだろう。  
しかし、戦場では鬼とも呼ばれ、調練では凌介様や真咲様をも容赦  
なく叱り飛ばしている熱血漢の備中様が、おかしな格好で腰を突き  
だし、あまりにも悲しそうな声で唸るので、同情しつつも、思わず



吹き出しそうになる。

「すぐ参ります。今しばしお待ちくださいませ」

あわてて顔をそむけた私は、中庭の凌介様を呼びに、ここまで登ってきた階段を走り下りた。

「不幸のお守りい？」

真咲様が素っ頓狂な声を上げた。

その声は、調練が終わったばかりの中庭に、ビンビンと響き渡った。

「叱ッ！ 声でかいって」

凌介様が制する。

時間はあれから少し後、凌介様をはじめ、駆けつけた一番隊の兵士たちにより、備中様が無事お屋敷へと助け起こされて行ったその後のことである。

「備中殿が先日樺山社かばやまやしろで買ってきたんだが、以来、あまりに不幸が続くんで、俺らに返して来てくれってさ」

「はあ？」

備中守様は、最近立て続けに不幸に見舞われているらしい。

三日ほど前には、屋敷でボヤ騒ぎがあり、次には可愛がっていた愛馬が足をくじいた。つい先日は、他城への昇進栄転にも外れたと落ち込んでいたと言う。

「チッ、高岡城主たかおかに栄転か。あのタヌキ親父め、隠れて運動してやがったな。」

「とにかく、それが駄目になったのも、そのお守りのせいだと固く信じてんだよな、備中殿は」

「しかしよお」

真咲様が仏頂面で続ける。

「それならオヤジが自分で返しに行きゃいいじゃねえか。なんで俺たちが……」

「ぎっくり腰で寝込んだよ。登城中雑木林で滑ってな」

凌介様は、笑いを含んだ目を私に向けて、

「朝芽が通りかからなかったら、ヤバかったってな」

「おい、マジかよ……」

真咲様の顎が、げんなりと落ちる。

「不幸のお守りだなんて、冗談きついつてね。ま、野暮用はさっさと済ますに限るさ。気の毒な上役殿のために、ひとつ走り行って来ようぜ」

流れる汗をぐいとこすった凌介様は、私を見て明るく言った。

「朝芽も来るかい。こんな任務だけど、樺山社は行ったことないだろう？」

「なら、俺もあいつを連れてってやるか。」

真咲様がにやりと私の方を見る。

「水杖も、よろしいのですか？」  
みなづえ

「おう。お前ら仲いいんだろ。呼んできてやれよ。」

「ありがとうございます！」

私は喜んで親友を呼びに走った。

久しぶりの城外である。山はすっかり様相を変え、新緑の薄芽はすでに濃緑の若葉に成長していた。

季節遅れのフジの花が、濃厚な緑の山肌に、紫色の彩りを添える。見上げればどこまでも青い空に、千切れ雲が白く浮かんでいる。日差しは変わらずきつかったが、山を分け入るにつれて空気はぴんと張り詰め、谷間を走る溪流の爽やかな音と共に、汗ばんだ体を冷やしてくれた。

仙境とも見まごう美しい奥山の小道を、一頭の馬に小荷物を乗せて、私たちは連れ立って歩いた。噂のお守りも、白木の小箱に封をして、馬の背にくくりつけてある。

樺山社までは山道を約三里。騎乗なら一刻もかからぬ距離だが、

険しい山また山の奥にあるため、徒歩で4時間ほどを見越していた。  
「嬉しいな、朝芽とこうやって歩けるなんて。まるで観瀆みたきしやでん社殿に戻ったようね。」

水杖がはしゃぎながら言った。

主二人は馬を引いて先に立ち、私たちは従者の立場を意識しつつも、美しい景色に心も弾み、つついとおしゃべりに花を咲かせていた。

「炊事場のお当番はうまく決まったの？」

「手配はしてきたけれど、少し心配だわ」

夏草の香立ちこめる山道は確かに昔を彷彿とさせてくれたが、お旗女としての仕事の話が増えたのは、私たちの中の変化の一つだ。

「朝芽」

ふと、水杖が笑みを浮かべて私を見た。

「それで、どうなの。出石様とは？」

「ちよっ……やめて、そんな大声で」

私は赤くなって、拒否するように手を振った。

「お城中の噂よ。危機に陥ったあなたを助けに、冷静な出石様がさまざまに活躍をした話」

「あ、あれは……」

思わず絶句する。つい半月ほど前のお書物庫での事件がよみがえり、私はぶるっと首を振った。

「誰だって同じことだったわ。凌介様は部下を大切にされる方だもの」

噂は間違いではない。私が今こうして元気に歩いていられるのは、凌介様がそれこそ命がけで助けて下さったからだ。

でも、それ以上の意味を考えることは、今は僭越せんえつに思えた。

「来て下さった、それだけでもう十分よ」

「……そうね。ごめんね」

その声に一抹の寂しさが含まれているように聞こえて、私は思わず友の顔を見た。水杖は少し目を伏せて歩いている。

「……助かったからこうやって笑い話にも出来るけど、朝芽は怖い目に遭ったんだものね」

「いいのよ。済んだ話だわ。」

私は明るく言った。あの事件の後はしばらく夜も眠れず、駆けつけた水杖によく慰めてもらったものだった。

「水杖、なにかあったの？」

「ううん」

言い洩る水杖にあれこれ問いただしてみると、やがて、一つの出来事が浮かび上がってきた。

つい先日のことである。

真咲家には、水杖のほかにも幾人かの下働きの女性たちがいる。彼女たちの主な仕事は、炊事や洗濯と言った日常の雑務だが、主である真咲様の起居に深く関わる者もいて、中にはゆくゆくは主の傍らに……と想いをかける女性もいるらしい。

真咲様は派手好みで、性格も豪胆な威丈夫だ。色鮮やかに染められた京風の鉢金に、先祖代々の深紅の鎧。鎧の下に着る軍衣もあでやかで、黄金色の長槍を突いて馬上にある姿などは、まばゆいばかりの輝きと存在感を放つ。毎晩の酒量も豪傑にふさわしく、酒樽を抱えてあちこちの軍営で飲み明かすとか。それでも一線をピタリと引いているところが、浮いた噂ひとつ聞こえないのは、御奉公一途な一面も強く持っているのだろう。

そんな主を持つ真咲家の女中たちにとって、この度お側に上がった新参の水杖の存在はかなりの脅威と映ったらしく、

「あのような小娘に先を越されては」

と、嫉妬と焦りの波が彼女たちの間に広がったとか。勿論、水杖はお役目第一と心がけ、明るく勤めて来たのだが……。そんな先日、奥女中の中でもひとときわ美貌で有名な一人が、下城する真咲様に大胆に言い寄ったと言うのだ。

「聞きましたわ、殿のご親友が、一旗女の為に勇を奮ったお話を。」

殿も、もしわたくしが危うい目にあつたなら、助けてくださいましね……？」

大人の色香でしなだれ続けるその女性を、最初は軽くあしらっていた真咲様だったが、その言葉を聞くやいなや、すさまじい大声で怒鳴りつけたそうさだ。

「馬鹿野郎！ 甘えんじゃねえ！ てめえの身くれえてめえで守れ！ そいつが真咲家臣の心がけてえもんだろうが！ だから女はめんどくせえ！」

雷のような大声に、妖艶な美女も顔色をなくして奥へ逃げ込み、座は一度に静まり返った。水杖はその時、明日の調練の朱書きを持って別室に控えつつ、この一部始終を聞いていたのだった。

「影芳さまは、本当はお旗女も置きたくなかったのかもしれないわ。<sup>かげよし</sup>長浜の掟だからしぶしぶ従っているのかもしれない。あの方は戦場や調練が何よりの生きがいであらうしやるから……。そう思うと、私、なんだか自信なくしちゃって」

「水杖……」

そんなことない。

私は思った。確かに武骨で単純な物言いが目立つ方だが、観瀆社殿で水杖に見せた優しさは、今も私の中にしっかりと焼き付いていた。今日だって、すぐにお供に呼んでいたではないか。

水杖を疎んじていらっしやるはずがない。

しかし、それを根拠に大丈夫よと、落ち込んでいる親友の背を押す事はなんだか安易な気がして、私は結局何も口にすることができなかった。

重い沈黙が辺りを支配したとき、

「おうーい！ お前ら早く来いー！ 休憩しようぜえ休憩！」

彼方で当の真咲様がのんびりと呼ぶ声がした。傍らで凌介様も振り返っている。

気まずい呪縛がすっと解け、救われたように顔を見合わせる。

水杖は大丈夫よ、頑張るわと言うように、にっこりと笑った。私たちはハイッと叫び、弾かれたように駆けだした。

(2)

「……最悪だ」

真咲様が凶悪な顔で天を仰ぐ。

「こりゃないよな……」

凌介様もため息をつく。

さっきまでの晴天がうそのようなすさまじいどしゃ降り。私たちは、騒ぐ馬を苦勞して導きながら、大きな木の下に駆け込んでいた。天が光る。アッと思った瞬間、すさまじい轟音が耳をつんざいた。激しい稲光。頭上をにわか覆った黒雲が、見る間に彼方の山を隠し、その中を蟻のようにゆるゆる進む私たちに、すさまじい牙を剥むいている。初夏の嵐が、本格的に山全体を覆おうとしていた。

「不幸のお守り、早速発動ってか！」

落雷にいななく馬をなだめつつ、馬から自らの腰に巻きつけ直した白木の小箱を不気味そうに見ながら、びしょぬれになった凌介様が苦々しげに言った。

「冗談じゃねえぜ！ あと何里だ！」

吹きすさぶ暴風に逆らって、真咲様が叫ぶ。

「さあてね！ 迷子にならなけりゃ二里ってどこか」

私と水杖は、馬の背から下ろした荷物を、急いで雨よけの油紙で巻いていた。大木の下とはいえ、横殴りの雨は容赦なく吹き込み、荷物も、着物もすでにぐしゃぐしゃだ。

稲光がまたも天を切り裂き、落雷の度にどおん！ と大地が揺れる。

不安そうに上を見ていた凌介様が、意を決したように叫んだ

「ここはまずい。出るぞ、影！」

「正気かよっ！ この雨だぞ凌介！」

真咲様が叫び返した瞬間、

ピアッ！ と閃光が辺りに走り、

ズッガアアアン！

大音響と共に地面が揺れた。空気が爆発したかのような衝撃。反射的に私は水杖の手にしがみついたが、その手が引きちぎられるようにして離れ、私は単身、どしゃ降りの山肌に吹っ飛ばされた。

今の木に落ちたんだ！

思った瞬間、急な斜面に叩きつけられ、頭が真っ白になる。私の頭上で空荷の馬が棹立ちになり、どうっと足を滑らせて倒れ込む。次の瞬間、その姿は巨大な壁のように私の上にのしかかってきた。考えるよりも早く思いきり横に体を投げ出す。泡を吹いた馬の巨体が、すれすれのところを地響き立てて転がり落ちる。手綱が生き物のようにうねって私の足を払った。あっと思った時には、私の体はバシャン！ と引き倒され、馬の後を追って、泥で滑る斜面を転がり始めていた。

「ああっ……！」

夢中で周りの小石をつかむが、爪がむなしく泥しぶきを飛ばすだけで全く手ごたえがない。足の先には狂奔して落ちていく馬、その更に先には深い谷間がぼっくりと口をあけている。

「凌介！ 朝芽が落ちた！」

水杖をつかむように引きよせた真咲様が蒼白になって叫んでいるのが、頭上にちらりと見えた。

見る間にその姿が遠くなっていく。

狂奔していた馬の姿がずっと見えなくなった。

絶壁から落ちたのだ！ 続いて私の足元いっぱい、暗く蒼い谷間が開け、もう駄目……！ と観念の眼をつぶったその瞬間……！

ガッと腕を掴まれて、体がガクン！ と宙づりになった。間一髪、私の体は宙に乗り出すようにして止まった。小石がばらばらとはる

か下方へ降り注ぐ。

「目的地はそっちじゃないって！」

全身泥だらけの凌介様が、引きつった笑みを浮かべつつ、間一髪引き止めてくれたのだ。

真咲様の叫びに、崖道を飛んできてくれたのだろう。

「す……すみません、私……」

「いいって！ 歩けるか！」

そのまますさまじい力で引き揚げられ、たくましい腕に支えられる。泥土でずるりと滑る足元を慎重に踏みしめつつ、私たちは一歩、険しい斜面を上がり始めた。

「馬が……」

「ああ。気の毒だったな……」

低くつぶやいた凌介様は、パツと振り払うように顔をあげて、「チッ！ 想像以上の神通力だ。どこまで不幸を呼ぶんだか！」

忌々しげに腰の小箱をにらみつけた。私も思わず、その小箱を見つめた。

「すっかりつかまってるよ、朝芽。もうちょっとだから」

私の視線に気づいたのか、凌介様が不自然に明るい声を上げる。

真咲様と水杖が、懸命に手を差し出してくる。

しっかりとその手につかまった時、私の全身に初めて震えが襲ってきた。

〈続く〉



## 不幸のお守り・中編

(3)

山中を激しく叩いていた雨は、夜に入ってようやく小ぶりになった。

私たちがほうほうの態で溪流沿いに立つ小さな茅葺小屋に転がりこんでから、数刻が経っていた。

この小屋は元々、樺山社かはやましろを目指す参詣人たちの休息所として作られたもので、中は広く小綺麗で、土間には簡単なお台所も設けられている。

幸い濡れずに残っていた乾いた小袖に手を通し、かまどに備えてあった竹の細木をくべて火をおこし、それを囲炉裏いろりの炭に移した。主たちもドロドロになった肩衣かたぎぬを着替え、凌介様は簡素な一重の小袖、真咲様まなきはもろ肌脱ぎになって、囲炉裏に赤々と燃える炎を囲み、低い声で話しこんでいる。

水杖は先ほど、汚れた衣服をすすぎに裏手の溪流へと降りて行った。

「危ないから、井戸端にしては」

と案じたのだが、水杖は大丈夫よと言って笑った。

「私の水辺を好きだったこと、朝芽あさめも知っているでしょ？」

それは、傍から聞けば明らかに奇異な会話だったが、その言葉が含む真の意味を私はよく知っていた。

「それに主お二人の肩衣や袴を、汚れたまま放っておくわけにもいかないわ」

「そうね……でも、気をつけて。」

にこりと笑った水杖に洗濯を任せ、私は厨房で簡単な夕餉の支度をすることにした。持参の粟飯を炊くくらいしかできなかったが、

竹棒を片手にかまどの火を調節していると、凌介様がずっと傍らにやって来て、薪をくべるのを手伝ってくれた。

「真咲のお旗女どのは？」

「お召し物の汚れを落としに参りました。すぐに戻ると思いますが」

「そうか。真咲が気にしていたから。すまないな、話し込んでいて。今夜はもう休み、明日早く出ようか」

「はい」

それは他愛もない会話だったが、私は頬に血が上るのを抑えることができなかった。失礼なことだと思いつつも、傍らにしゃがんだ凌介様に、つい目を向けてしまう。まだ濡れている栗色の髪が端正な顔に無造作にかかり、より精悍な顔立ちに見えた。唇を引き結び、瞳を伏せがちに薪をつつく頬には、炎が作る濃い影が落ち、普段の明るさに似合わず、まるで何かを憂いているような表情にも見える。ぐいとたくしあげられた一重の袖口からのぞく二の腕はたくましく、竹棒を握るだけの動作にもなにか張り詰めた力強さを感じた。この腕に、何度支えてもらったことか……。思い返すと、ますます頬が熱くなる。

「朝芽もひどい目に遭ったな。怪我がなくてなによりだった」

ぱちぱちとはぜるかまどの炎に照らされながら、凌介様は沈んだ声で呟いた。が、次の瞬間、

「元凶の元……見るかい？」

不意に腰の木箱に手をかけると、いたずらっぽい笑みを浮かべてこちらを振り向いた。途端に憂わしげな表情は消えて、魅力的な笑顔が照らし出される。

「よろしいのですか？」

頷くと凌介様は、嚴重にくるんであった布をとき、白木の小箱を帯紐から外した。主命の小箱は、さすがに汚れていない。封を切り、ふたをそつとずらして開けると、真綿にくるまれた「お守り」があらわれ、私はちよっと息をのんだ。

しかし、凌介様の指がつまみあげたのは、なんの変哲もない小さ

な赤い守り袋だった。門前町の縁日で売られているものと殆ど変りないように見える。

「朝芽はどう思う。これは本当に不幸のお守りなのか……」

主の声に、じっと目を凝らして差し出された手のひらを見つめる。ふと、私の脳裏に響くものがあつた。それはかすかな声……いや、耳に聞こえたわけではないが、敢えて言うなら頭の中にピン！と響いた小さな波紋だった。

改めて、真剣に覗き込む。

頭の中に、ふわっと、まばゆい光が走った。汗が薄くにじみ出す。間違いない。このお守りには、不思議な力がこめられている。それが何かは解らない。このままなのか、これから成長するのも見極められない未知の力だ。

唯一つ確信できたのは、このお守りには邪気がない、ということだった。とても意外だったが、これは人に害を及ぼす力ではない、とはっきりと解った。しかし、そうすると昼間のあの一連の災難は……偶然だったと言うのだろうか。

「なにか……解ったのかい」

凌介様の声に、私はハッと我を取り戻した。少し迷ったが……私はやがて首を振った。

感じたことを素直に語るには、あまりに言葉が足りない気がした。現実離れしすぎている。それに解ってもらうには、すべてを語らなければならぬ。わたしが、なぜそれを感じることができるかと言うことも。

「……そうか。朝芽になら解ると思ったんだが」

「なぜですか」

驚いて顔を上げる。凌介様の表情は変わらない。

「朝芽には俺たちと違う、不思議な何かが見えてるんじゃないかって思ってさ。ほら、半月前、山賊の妖術使いに襲われた時も……」

……そうなのだ。稀代な妖術を操る山賊頭、ふちがみげんき 洩上幻奇。あの時私

は、つい、普通なら見えないはずの彼の妖気に反応してしまったのだ。

凌介様は、今までずっとそれを不審に思われていたのだろうか。自分の身命を預けるはずのお旗女が、得体の知れない力を持っている、と、不気味に思われていたのだろうか……。

青ざめた私に気づいたのか、凌介様は不意に明るく笑った。

「でもさ、関係ないって。もしも見えたら便利だってだけのことだろ？ 妙法院様のいる長浜忍軍だって、大概不可思議な術を会得しているって聞くんね。朝芽が言いたくなければ言わなくていい。俺も聞かない。だから、悩むなって」

明るい声を裏付けるように、凌介様の黒々とした瞳が、炎に照らされて楽しそうに揺れているように見える。

「曖昧なものは、曖昧にしとけばいいってことさ。このお守りも……」

と凌介様は、素早く小箱の蓋を閉めると

「返せばおしまい、ってね」

両手をパンと膝の上に落とした。

その仕草がおかしくて、わたしはクスリと笑った。胸に温かいものが満ちるのが解った。無意識なのかもしれないが、凌介様は、私の不安をいつも笑い飛ばして下さる。だから、側にいるといつも、とても落ち着くのだ。今夜もまた、彼は私を安心させてくれている。

「しかし……不幸のお守りとはよく言ったもんだ。こんなちっぽけなモノに、今日みたいな災難を呼ぶ力があるなんて」

天井を仰いでため息混じりに言う凌介様に、私は静かに話しかけた。

「そうですね。でも……」

「ん？」

「これは本当に、その……不幸を呼ぶだけの存在なのでしょう」  
そう言いながら私は、先程の美しいとも言える思念の波を思い出していた。

「……？」

凌介様が小首をかしげて、怪訝そうにこちらを振り向く。

「……私は一年前、故郷の村を捨てるようにして出てまいりました。」

揺らぐ炎に照らされながら、私は、水杖と共に観瀆社殿に入ったいきさつを、ぽつぽつと話し始めた。なぜ村を出ることになったのか。その理由を詳しく語る事はまだ出来なかったが、それは凌介様に初めて語る、私と水杖の重要な過去の一部分だった。

「……私たちは傍から見れば、故郷から追い出され、逃げだした不幸な娘と思われるかもしれませんが。だけど、私たちは自ら決めて村を出たのです。あの時は辛くて、あまり自覚は無かったけど、そのおかげでとても満ち足りた今があります。そう思えば、故郷を失ったことも不幸であったとはいえません。人の生涯を通して、苦しみと喜びは、別々の物ではなく、どこかでつながっているのかもしれない。これは本当は、それを教えるためのお守りかもしれないと……ふと、そんな気がしたんです」

凌介様は黙って耳を傾けていたが、やがて静かに言った。

「なるほどね。そう聞くと……今日のことでって全部、俺たちに油断があったとも言えるよな。滑りやすい崖の上で立ち止まったこと、落雷の危険のある大木の下にいたこと。省みることなく、全部こいつのせいにしちまうことが、即ち不幸なのかも知れないな」

自分で決めて進む道なら、失敗はあっても不幸は無いよな。

そう言つてにこりと笑う。あの魅力的な笑顔が、また現れる。

「そう、思います。」

私も笑みを返した。

お仕えして約2カ月、これほど色々と語り合ったのは、初めてだ

った。凌介様は、元々喋るよりも聞く方だと解ってはいたが、それでも、私のような一従者の言葉にまで、真摯に頷いてもらえたことは嬉しかった。

故郷と決別したおかげで、私は凌介様に会えたのだ。

それは、私にとって、数多の艱難辛苦に代わる喜び……。

穏やかなひと時が突如破られたのは、うつむいてその思いを噛みしめていたその時だった。

真咲様が、血相を変えて駆けこんできたのだ。

「大変だ！鉄砲水だ！土砂が押し寄せてくるぞッ！！」

「何だと……！」

弾かれたように凌介様が立ち上がる。天井からかぶさるように、ゴオッという恐ろしい音が聞こえてきたのはその直後のことだった。

「小屋から離れろ！」

壁に立て懸けてあった刀をつかみ、真咲様が叫ぶ。私は手に触れた荷物を見る間もなくわしづかみにすると、主たちの後に続いて真っ暗な戸外へと走り出た。

「こっちだ！岩の上に逃げろ！」

真咲様が先に立って誘導する。すさまじい轟音が頭上の斜面から降り注いできた。それは小木をなぎ倒し、たった今私たちが座っていた小さな小屋を押し流した。茅葺の屋根が紙のように折れて、泥の中に飲み込まれる。泥流はそのまま真下の溪流になだれ込んだ。かまどの煙が悲鳴のように白く上がるのが見える。そのすさまじい光景を横目に、間一髪、私たちは溪流に突きだした、巨大な岩の上に這い上がった。

「おい、あいつを知らないか！」

真咲様が血相を変えて叫ぶ。

水杖の姿がないことに、その時私は初めて気づいた。

「一緒じゃなかったのか」

凌介様が立ち上がる。

「川まで下りたが、暗くて見つけられなかった。行き違ったかと小屋に戻って来た時、鉄砲水に気付いたんだ！ あいつ、どこにいたんだ！ ちくしょう、これもオヤジのお守りのせいなのかよお！」  
日ごろの剛胆さを忘れたように、真咲様が憑かれたように口走り、おろおろと岩場の上を歩きまわる。凌介様の冷静な腕が、その肩を落ち着かせるようにぐっとつかんだ。

「影！ 落ち着け！ ……とにかく落ち着け。川辺まで降りて呼んでみよう。朝芽はここにいろ。だが、危険を感じたらすぐ俺たちの方に来いよ」

言うや否や、その姿が、暗い岩場を素早く伝い出す。

「おい、ちよっと待て凌介！」

慌てて真咲様が後に続く。私は一人、岩の上にとどまった。

鉄砲水は、ひとまずおさまったようだ。しかしいつまた崩れるか解らない。今いる岩場はかなり頑丈で高く突き出しているため、安全なようだが、下に降りた二人の主は、逆に危険にさらされているとも言える。

水杖、どこ……！ 早く戻らないと、危ない！

祈るような気持ちで、岩の上に立ちあがって、流れに目を凝らす。

……居た。

水杖は、すぐ目の前の、水の中にいた。

それは文字通り水中に、と言う意味である。闇夜の暗い濁流の中でも、私にはその姿がはっきりと見えた。胸にしっかりと抱えられた真咲様の華やかな肩衣の模様が、錦鯉のように翻って見える。彼女は濁流の中を自由自在に……泳ぎ回っていた。

おそらく水杖は、不意に押し寄せた鉄砲水に吞まれたのだろう。しかし、彼女は荒れ狂う濁流に身を任せ、敢えて水の中へと身を沈めたのだ。彼女の姿は、流れに乗るようでもあり、また自在に踊っているようにも見えた。白い姿が、ひらり、ひらりと渦を巻く急流

の中で動いている。流されることもなく、流れに逆らうこともなく、その様子は、まるで美しい静かな湖を伝説の人魚が泳いでいるかのようだ。

そんな友の有様だったが、私が驚くことはなかった。闇夜の川に、一人で洗濯に降りると言った時から、心構えはあるのだろうかとある程度想像はついていた。私と同じ、水杖も選ばれし者……お旗女なのだ。

やがて、水の上を流れる泥流の勢いが弱まった頃を見計らって、水杖は水面に顔を出した。

私は叫びながら大きく手を振った。水杖がにっこり笑う。夜の濁流に浮かぶその白い顔を、何も知らない人が見たら、あまりの妖しさに肝をつぶしたかもしれない。

「水杖っっ!!」

突然、下方の岸辺で叫び声がした……と思った瞬間、ザブン!

大きな人影が水中に踊りこむのが見えた。

真咲様だ!

私とほぼ同時に、真咲様も浮かび上がった水杖の姿を見つけたに違いない。おそらく水杖が溺れていると思って、動転されたのだろう。そして真咲様はためらいもなく、濁流に飛び込んだのだ!

「影! 待てっ!」

近くで凌介様の鋭い声がしたが、真咲様は濁流にもまれるようにして水杖の方に向かって泳いでいた。しかしあまりに水の勢いが強く、その姿が闇の中に浮いたり沈んだりしている。私は息をのんだ。あの武人の代表のような頑丈な真咲様が、かなり苦戦しているようだ。

水杖が、濁流の中必死でこちらに近づこうとしている真咲様に気付いた。その目が大きく見開かれる。

しかしそれも一瞬のこと、ためらいなく水杖は水中に潜ると、真咲



様の横にすうっと泳ぎ寄った。真咲様のたくましい腕が水杖をしかりとつかむ。急流でほとんど体制がとれずばしゃばしゃ水を跳ね散らかしている真咲様を、水杖はそれと解らないようにすうっと支え、徐々に岸边にと近づいてきた。

私は岩から降り、凌介様の元へと走った。

暗い中、凌介様も水杖の本当の動きには気付いていないだろう。誰が見ても、真咲様が濁流から水杖を救った、そう見えるはずだ。それで良かった。水杖もそれを願っているはずだ。やがて、岸边から身を乗り出すようにして差し出された凌介様の手を真咲様がしっかりと握り、ずぶぬれの二人が水から引きあげられた。

「お前っ……。溺れるかもしれねえって時だったのに……！俺たちの肩衣を離さなかったのか！？」

両腕を地面についてせえぜえ喘ぎながら、水杖の抱えているものを見た真咲様が、仰天したように言った。

「馬鹿野郎！ そんなもんにとだわって、お前に万一のことがあったらどうすんだよ！」

うつむく水杖に、真咲様が雷のような声で怒鳴りつける。その声が震えている。

「お前がいなくなったら、誰が調練の後俺の背を流してくれるっつうんだよ！」

「……そんなことさせるなって」

凌介様が呆れたように、横でつぶやく。

「うるせえ！ こいつがしたいいっつうんだから！」

狼狽したまま真咲様が怒鳴り返す。

水杖は泣いていたが、それが嬉し泣きだと言うことが、私にはよく分かっていた。

〈続く〉

## 不幸のお守り・後編

(4)

激しい山中の一夜も、ようやく明ける時が来た。

昨夜の嵐は東へと去り、頭上の空は美しく晴れ渡っている。しかし目を転じれば、山道に倒れた巨木やまき散らされた葉っぱ、そしてまだごうごうと鳴り騒ぐ泥で濁った溪流の音が、嵐の痕跡を色濃く残していた。

太陽が辺りを照らし始めた早朝、私たちは目的地の地、樺山社かばやまやしろに向けて出発した。山気立ちこめる杉木立に金色の太陽光が斜めに差し込み、それを受けて朝露がきらきらと珠のように輝いている。それは仙境のように美しい光景だった。

しばらく歩くと、木立の合間や石段の影に、小柄な白木の鳥居がちらほらと見られるようになった。

「小さな祠がたくさんあるだろ。この山はもう、社の敷地内だから」  
凌介様りょうすけが説明してくれる。

丹塗りの大きな鳥居門をくぐった。それまで眺めて来た野ざらしのものとは違い、こちらは入念に磨かれている。素朴な山中には不似合いなほどの、それは巨大な人工の柱に見えた。樺山社の境内に入ったのだ。正殿まではまだ少し山道を歩かなければならないが、ここまでくれば、と言う安堵がようやくこみ上げてくる。

「あと少しだ」

朗らかな凌介様とは対照的に、真咲様まゆみは元気がない。今朝からあまり口を開かず、とぼとぼと最後尾をついてくる。水杖みなづえがちらちらと心配そうに様子を見ているが、それにも気付かない様子で眉間にしわを寄せ、何か考えこみながら歩いている。

「おい影、どしたの」

吊り橋を従えた最後の険しい崖道に差しかった時、とうとう先頭の凌介様が振り返った。私たちも足を止める。

「季節外れの水練で、腹でも壊したか」

にやりと笑った挑発にも乗らず、少し沈黙した後、真咲様は深刻な顔でぼそぼそと話し始めた。

「昨日は朝芽が崖で滑った。昨夜は水杖が濁流に落ちた。……ってことは、次は俺か凌介じゃねえか」

「なんだよ、影。おまえ、こいつを信じてんの？」

腰に下げた小箱を軽く叩いて、凌介様がからかうように答える。

「まさか、怖いのか？」

「バカヤロウ！俺は戦なら何も怖かねえんだよ！だが、こんな得体のしれねえ……この前の妖術野郎もそうだったが……目に見えねえ摩訶不思議は調子狂うんだよ！」

躍起になって真咲様が喚く。その声は荘重な朝の空気をビンビンと震わせる。

あまりにその様子が深刻なので、私たちは思わず顔を見合わせた。昨夜から真咲様は中々落ち着けていない。水杖がクスクス笑っている。

「解った解った。ほら、行くぞ。吊り橋渡ったら、正殿の屋根が見えるだろ」

凌介様が軽くいなす。真咲様はまだ気持ちの整理がつかないようで、ぶつぶつ呟きそわそわとあたりを見回していたが、崖の傍に小さな道祖神が祭られているのを見た途端、ぱあっと顔を輝かせた。

「よっしゃ！皆でお参りしていこう！厄除けだ厄除け！」

「もう、すぐそこだぜ？」

凌介様が呆れたように言ったが、真咲様はてんで構わず、  
「なんでもっと早く思いつかなかったんだ俺はあ！最初っから道々、こうやって厄除けしてきやあ良かったんじゃねえかつ」

不安が解消した満面の笑みで崖の祠に走っていく。

「厄除けって……どうやるんだよ」

凌介様がぼやく。真咲様のどなり声が彼方から追いかぶせるように響く。

「こらあ凌介！ お前も祈れ！ その辺にもう一つあるだろ！ 水杖は朝芽と吊り橋の向こうだ！ 渡ったところにも一つあったぞ！」  
「うるせえなあ」

凌介様が肩をすくめて、真咲様の方へ歩き出す。私たちは顔を見合わせたが、真咲様が早く行け！ とばかりに腕をぶんぶん振り回すので、先に吊り橋を渡ることにした。水杖がこらえきれずに笑い出す。私もクスクス笑った。

「お前ら！ 心こめて祈れよ！ あと少しだが、誰に何が起こるか解らねえぞ！」

歩き出した私たちの背中に、真咲様の大声が追いかけてきた。

吊り橋を渡ると、真咲様が言われたとおり、林の中に一つの祠がひっそりとまつられていた。切妻屋根に観音開きの、木で造られた小さなお堂。それは何年もの間風雨にさらされて固く縮こまっているように見える。参詣者が供えたのだろうか、素朴な野草の花がまだ瑞々しい。

二人で地面に膝をつき、礼拝する。

「どうか、度重なる災厄から、私どもをお守りくださいませ」  
静かに手を合わせた時だった。

ふと、頭の中に何かが響き渡った気がした。

いや、気のせいではない。それは、どこか懐かしい小さな波紋。

「あ……？」

私は額を抑えた。水杖が驚いて振り向く。

「朝芽？」

波紋は収まらない。それどころかどんどん強く、深くなっていく。苦痛は無い。しかし、厳かに研ぎ澄まされた念波が、見る間に私の脳裏にあふれ返っていく。

これは…！

突然私は、昨夜の出来事を思い出した。

あのお守りだ！

この感覚は、凌介様の手のひらのお守りを見たときに感じたものだ。邪気はない。ただ、前夜のお守りとは比較にならないほど、今度の思念は深く、重い。

「……っ！」

私はついに両手で顔を覆ってしゃがみこんだ。水杖があわてて肩を支える。

「朝芽どうしたの！　しっかりしてっ」

「大丈夫……」

弱々しく答えた瞬間、頭の中におごそかな思念が響き渡った。

それは声と言ったものではなかった。敢えて言うなら、黄金色の思考の波とでも言うべきか。混乱する頭の中に、それは弾けるように伝わってきた。

『…姫。…杵築村五郷鬼神社の姫…』

私は顔を上げた。

間違いない。目の前の祠の主が、私に話しかけているのだ！

『我が身は樺山かざんの辻神なり。乞う、汝なんじ我が力もて、我が魂たまの欠片を碎け』

「魂の、かけらを…？」

呆然と呟く。それは、あの……お守りのこと……？

『我過あやまちて、我が魂の欠片塵界じんかいに送れり。良き光悪しき影与えぬれば、汝が手で清め給われ』

あのお守りは、では、この祠の神様が、間違ってお創りになったもの……？

「朝芽！　どうした！」

不意に凌介様の良く通る大声が、彼方から響いた。と同時に、脳

裏を覆っていた美しい思念がかき消されたように消えた。現実の光景がどっと目の前に溢れ、思わず地面に手をついてしまう。

「待ってろ、すぐ行くから！」

振り向くと、凌介様と真咲様が吊り橋を駆け渡って来るところだった。私たちの様子がおかしいことに気づいてくれたに違いない。

「良かった、顔色が戻ったわ。具合はどう？」

肩を支えながら水杖が、ほっとしたように私の顔を覗き込んだ。どうやら水杖には今の声は聞こえなかったようだ。

「ごめんね、もう……大丈夫よ」

微笑み返したその時だった。

私たちのすぐ後方で、ブツンッ！ と嫌な音を立て、何かが空中にパアッ<sup>がくぜん</sup>と散った。

愕然<sup>がくぜん</sup>と振り向く。

それが、吊り橋を支えていた巨大な白綱の破片であると解つたのは、すぐそのあとのこと……。

一瞬の内に分解した吊り橋が、バラバラとすさまじい音を立て、主二人を乗せたまま、恐ろしいほどゆっくりと深い谷底に落ちていく光景が、呆然と見開いた私の瞳に映ったのだった。

## (5)

「影芳さま……！」<sup>かげよし</sup>

悲鳴をあげ、水杖がだっと走りだす。

恐怖で膝が折れそうになるのをこらえながら、私もあわてて崖の淵に走り寄った。

必死で、谷底を覗き込む。

すぐ側で、水杖がああ、と安堵のため息をつくのが聞こえた。私も、ふうっと、肩の力を抜いた。

ズタズタに裂けて垂れさがる支え綱の一本に、かろうじてしがみついている主二人の姿が、目に飛び込んできたのだ。

無事だった……！

おそらく吊り橋を支えていた首綱のあちこちが、昨夜の嵐で傷ついていたのだろう。そこを私たちが無造作に渡り、次に主たちが走った衝撃で、突然切れてしまったのだ。

二人がつかんでいる白い支え綱は、一見頑丈そうに見えた。しかし眼下に落ち込む深い谷底に目をやれば、それはまるで一本の蜘蛛の糸のように細く頼りなく見える。これが宙づりになった壮健な若者二人をいつまで支えていられるのだろうか……。

真咲様の方が上方にいた。必死で命綱にすがりつき、それでも元氣よく喚いている。

「くっそおお！ やっぱ不幸が出やがった！」

「幽霊じゃ……あるまいし」

真咲様のすぐ足もとで、同じくしがみついている凌介様のいつもの落ち着いた声が聞こえ、私は胸をなでおろした。

お二人とも、怪我はなさそうだ。

「凌介！ 早く足場を探れ！ 登るぞ！」

騒ぐのをやめ、一転、表情を引き締めた真咲様が下に向かってどなる。その顔が不意に硬直した。

「凌介……おい凌介聞いてんのか！」

恐怖で心臓が跳ね上がる。凌介様の様子がおかしい。深く身を乗り出した私は、あっと息をのんだ。

凌介様の足元で、かなり大きな橋板の残骸が、二枚重なり、不気味に空中に浮かんでいる。それは一見不思議な光景だったが、よくよく眼を凝らした私の前に恐ろしい状況が浮かび上がってきた。

凌介様の腰紐には、お守りの小箱が例によってしっかりと結わえ付けられていた。その小箱が、分厚い二枚の橋板の隙間にがっちり

と食い込んでいる。板が浮かんで見えたのは錯覚で、実際は凌介様の腰に、お守りの小箱を仲介にして、重量級の厚い板二枚がおもりのようにぶら下がっているのだ。

やはりあのお守りには、何か不思議な力が宿っているようだ。普通ならとつくに重みで引きちぎられているはずなのに、小箱も紐も平然として巨大な板に引っかかったままだ。しかしその重量は容赦なく、凌介様の腰にかかっている。

凌介様は、それでも片手と両足で全体重を支え、もう片手で刀の目抜き釘を引きぬき、何とか腰紐から小箱を切り外そうと苦戦していた。しかし板の重みがあまりに強く、嚴重にくぐられた結び目が更に固く締まって中々小さな刃が通らない。片手に加えて、体をねじった無理な姿勢に、次第にその顔が青ざめていくのが解った。更にすさまじい重さでぴんと張り詰めた腰紐が、思いきり腹部を圧迫している。

「凌介！ 何やってんだ！ 刀で斬れ！ 早く斬れ！」

何とか手を貸そうと、めいっぱい腕を伸ばし悲痛な声でわめく真咲様に、凌介様はがっくりとのけぞりながら、大きく息を吐いた。

「……だめだ。この姿勢では抜けない。……影、すまん。」

「なんだとっ」

「どうやら……ここまでみたいだ」

「馬鹿野郎！ 死んでもあきらめるな！ い、いや、死んじゃいけねえ！」

その言葉に、私は凍りついた。あの重さでは、ゆくゆくは命綱が持たない。真咲様を救うために、凌介様は……自ら手を放す覚悟を決めたのではないか。

「凌介様！ 諦めないでっ！」

思わず叫ぶ。凌介様が汗だくになった顔をゆつくりと上げた。視線が合った。引きつった主の口元。視線が私を捉え、かすかに首を振った。それが別れの合図だと悟った私は、やにわに体を起こすと後ろに向かって駆けだした。



お願い、凌介様！　どうか、どうか今しばし持ちこたえて……！  
殆ど滑り込むようにして、先刻の小さな祠の前に駆け込む。息を整え、地に膝をついた。両手を固く握りしめる。ばつと顔を上げた私は、心の底から声を振り絞って叫んだ。

「祠の主よ、汝の願い聞き届けたり！　迅く、我に力を給わらん！」  
お願い、間に合って……！

その瞬間、黄金色の思念が怒濤のように私の中に流れ込んで来た。瞳が輝く。体の底から力がわき起こってくる。

足元で風が巻き起こった。跳ね起きた私は、その風に乗って飛ぶように崖の淵に駆け戻った。水杖が呆然とこの様を見ている。

私は崖に立ち、まだかろうじて持ちこたえていた凌介様を見つめた。真咲様が下に向かって何か叫んでいる。凌介様は固く目を閉じ、歯を食いしばっていたが、やがてゆっくりとその手から力が抜けていき……。

凌介様！　諦めちゃ駄目ーっ！

心が絶叫する。ハッとしたように凌介様が目を見開いた。その手に一瞬、力が戻る。その瞬間、私は思い切り両腕を前に突き出し、体中にみなぎる力を一気に前方へと押し出した！

黄金の光がほとばしる。それはお守りの小箱を直撃し、橋板ごと吹っ飛ばした。木枠が砕け、赤い守り袋が空中にふわりと投げ出される。それは一瞬間に止まったかのように見えたが、やがて青い炎を噴きながら、橋板の残骸を引き連れて舞うように谷底深く落ちて行った。

すさまじい重みから一度に開放された凌介様は、がくんと腕を伸ばしてぶら下がった。落ちる！　と一瞬私は青ざめたが、鍛えられた主の両腕はしっかりと命綱を握っていた。その肘を、真咲様の腕ががちりとつかむ。

「おらあ凌介！ 気合入れろや！」

凌介様が、汗だくになった顔を上げる。やがて二人はゆっくりと、綱を伝って登り始めた。

ようやくこちら側の崖に這い上がった主二人は、仲良く地面に倒れ込んだ。慌てて駆け寄る。

「俺たちや生き残ったぜ！ 不幸のお守りめ、ざまあみろい」

大地に辿り着いて安堵したのか、天を仰いで高笑いしている真咲様に、水杖が腰筒の清水を差し出していた。その目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

凌介様も地面に大の字になって横たわり、真っ青な空を見つめていた。その胸が、大きく上下している。

「お怪我は、ございませんか」

激しい動悸を抑え、傍らに膝をつきながら尋ねると、笑みを含んだ大きな瞳が返事の代わりに私の方を向いた。軽く頷く。

「良かった」

一度に体の力が抜けて、私はその場にへたへたと座りこんだ。心臓がばくばくと脈打って、今にも胸が張り裂けそうだ。もしかしたら永遠に凌介様とは会えなくなっていたかもしれない。その恐怖が今更ながらどっと押し寄せてきて、私は自分の腕で、固く自分の胸を抱きしめた。

「本当に、良かった……」

くっとうつむく。不意に目の奥が熱くなり、どっと涙があふれ出す。

「朝芽……。顔……。上げてくれ」

凌介様の優しい声。私は恐る恐る上を向いた。涙が頬を伝い、ぽとぽとと膝の上で組んだ手の甲に落ちていく。

ずっと、温かい手のひらが私の頬に触れた。長く美しい指が、私の涙で濡れる。凌介様はそのまま半身を起し、私と向かい合うよう

に座りなおした。その落ち着いた端正な顔が、穏やかな表情でじつと私の方を見ている。

「正直もう、駄目だと思った」

私の頬に掌を添えたまま、凌介様が静かに言った。

「だけど、手を放そうとしたとき、朝芽の声が聞こえた気がした。諦めちゃだめだと。だから腰のお守りが碎けた時、すぐに解った。朝芽が、助けてくれたんだな。」

涼やかな二重の大きな瞳が、まっすぐ私を見つめている。

「ありがとう」

しっかりと言った凌介様は、やにわに腕を伸ばすと、私を引きよせ……

そのままぐっと抱きしめた。

どきん！ と心臓が跳ね上がる。力強くたくましい胸に包まれて、一度に頬が紅潮する。とくん：とくん：と、いつかお書物庫で聞いた凌介様の心の臓の音が、優しく耳の奥に響く。心の底から心地よい安堵の波が湧き起こり、私はそっと目を閉じた。そのままあふれる涙をぬぐうことも忘れて、私はただじっと、その温かい腕に抱かれていた。

それは、夢のようなひと時だった。

「大変だ、吊り橋が落ちてるぞ」

轟音に気付いたのか、やがて正殿の方角から多くの人々が走り出してきた。

「おお、ご使者殿！ よくぞ御無事で」

衛士や、出仕の若者を多数引き連れた老年の宮司が、うやうやしくかけよってくる。

まずは本殿へ、と案内されるのを、ようやく起き上った真咲様の手を振って止めた。

「もういいんだよ。目的の物はなくなっちゃったから」

「……と、申しますと？」

怪訝そうな顔の宮司に、真咲様はすべてを語った。

備中殿に頼まれて、お守りを返しにここまで来たこと。

それから次々と不幸に見舞われたこと。

そして、最後に吊り橋と共にお守りは失われたこと。

「もう駄目だと思った瞬間、重さにやられたか、いきなり小箱が吹っ飛んでね」

幸いなことに、あの時真咲様には、私が放った不思議な光は見えなかったようだ。あそこで箱が砕けたのは、あくまでも偶然だと思っ  
ていらっしやるようだった。

「さようでございましたか。」

真咲様の話に、じっと耳を傾けていた老年の宮司は、深々と頭を下げた。

「あのお守りは、我が社に熱心に参詣されていたさる老夫婦が、ふた昔ほど前、今生の形見にと奉納して下されたものでしてな。何でもこの辺りの祠で拾われたとか申しましての。以来、幸運に見舞われ、幸多き余生を過ごされたとかで……。縁起ものだと思つて、備中様に差し上げたのですが、それは、とんだ御災難でございましたな」

「なんだか評判と全然違うじゃねえか」

真咲様がポカンとつぶやく。凌介様が叱ツ、と小突いた。

帰城に先立ち、私は穏やかそうな老神官に、崖のほとりの祠のことを少しだけ話した。勿論、私の身に起こった数々の不思議な事象には触れずに、観瀆社殿の名を借りて、手厚くお祭りするようにお願いしてみた。老宮司は快く引き受けてくれた。これであの祠の社神様も、心静かに参詣人を見守ってくれることだろう。

水杖にはすべてを話した。

「神様も落し物をするのね」

と彼女はおかしそうに言っていた。どういう経緯であのお守りが生まれたのかは、結局解らずじまいだったが、祠の主は、寂しかったのかもしれない、とふと思った。雨ざらしの林の中で、何百年もひとところに留まっているその寂しい思いが、なにかのはずみで人界へとこぼれてしまったのかもしれない。

杵築村五郷、鬼神社の姫……

脳裏の声がよみがえる。故郷と共に捨てたはずの名で呼ばれた事に、衝撃はあまり感じなかった。ただそれは、忘れかけていた過去を彷彿とさせる、かすかな不安を心に芽生えさせた。それは今まで感じたことのない、これからの未来に関する初めての不安だった。

不幸のお守り……

ふと、その言葉が去来した。

しかし私は、すぐにその言葉を打ち消した。

自分で選んだ未来なら、失敗はあっても不幸は無い。

私には、お仕えするべき大切な人がいる。支えてくれる友人がいる。彼らと共にある限り、わたしは迷うことなく前に進んでいける。

宮司の言葉は、後に驚きと共に裏付けられた。

翌日、ボロボロになって帰城した私たちに、備中殿が満面の笑みで告げたのだ。

“お守りのせいで”起きた備中殿のお屋敷の火事。焼跡の床下から、ご先祖が隠した黄金の武具が大量に見つかった。なんでも、源平時代にさかのぼるとかで、破格の値がつけられたそうだ。

愛馬の足の怪我からは、放っておいたら命にかかわる深刻な別の病気が見つかり、お陰で手遅れになる前に、専門の厩舎へと移すこ

とできたとか。

更に、流れた昇進先では後日お城ぐるみの不正が発覚し、もし着任していたら重大な責任を問われるところだったと言う。

「あれはやっぱり幸運のお守りだったのだ。頼む出石<sup>いっし</sup>！ 真咲！ 後生だから取り戻してきてくれい！」

まだ少し痛い腰をかばいながら小袖に取りすがった備中様に「オヤジ！！ いい加減にしやがれつつっ！！！」

真咲様がブチ切れたとか…。

幸福か災厄か。結局、あのお守りの効力については、ついに結論が出なかった。しかし青い炎を噴いて落ちて行った祠の神の魂の欠片は、深き谷川の清流できつと浄化されたことだろう。

私たちを襲った災厄も、備中殿に顕れたご利益も、ただの偶然だったのかもしれない。しかし、あそこまで偶然が重なるということ、やはり人の運命を変える何か大きな力が働いていたのだろう。備中様はその後もしきりと悔やまれていたが、それほどの力を人が手にして、果たして良かったのだろうか。そう、自分に問いかけた時……

あの結末でよかったのだ、と私は改めて思ったのだった。

頭上には、今日も青い空が広がり、中庭では、調練に向かう凌介様の大声がしている。

私は矢立<sup>やたて</sup>を胸に抱えると、夏の日差しの中へと駆け出して行った。

〈続く〉

## 第五章 暗雲・前編

### (1)

重たい梅雨空をまるで洗い流すかのような、激しい雷と豪雨の一夜を経て、長浜はすっかり夏になった。

青い空に真っ白な入道雲がむくむくと湧き起っている。

周囲を山々に囲まれた本城を中心とする長浜盆地は、連日猛暑に覆われていた。

くつきりと豪快な夏空とは対照的に、今年はぬるりと蒸し暑い日が多く、山に林にしようしようとうと鳴く蝉の声もどこことなく元気がない。

夕立ちが多い割には水田はひび割れ、野にも山にもぐったりとした空気の漂うおかしな気候だった。

国中を震撼させる知らせが届いたのは、そんな真夏のある午後だった。

辺境の城、坂遠城さかとおに、隣国が攻め入ってきたという。隣国守護、舟原氏ふなばらは、長年にわたり土岐氏と国境を奪い合う古敵で、中央からの目が届きにくい国境沿いの山岳地帯は格好の戦場となっていた。この地は取られ、取り返しりようちの泥沼の戦が何年も続き、数年前、とうとう業を煮やした土岐本軍が猛烈な追い討ちをかけた結果、晴れて長浜の重要な領知りようちとなった。そこに防衛の拠点として新しく築かれた城が今の坂遠城である。

その坂遠城が、今再び舟原軍に攻められ、連日苦戦していると言う。

辺境の凶報を受け、長浜中に緊張が走った。本城に駆け込む伝令の姿が日に何度も天櫓の高見櫓からも見受けられ、兵糧や武具などの救援物資が部隊と共にぞくぞくと坂遠城に送られて行く。

ここ天櫓城も臨戦態勢に入り、人々の動きが急激に慌ただしくなっていた。しかし、本城とは違い戦はまだまだ遠い空の下の話で、お城の空気には新しい冒険に挑むようなどこか陽気なものさえ漂っていた。

凌介様と真咲様も、ようやくぎっくり腰が治った高砂備中守様と共に、連日の兵務に追われていた。

戦が始まれば、お二人は足軽大将……即ち一小隊の隊長として複数の組頭くみがしらを指揮する立場となる。長柄隊は全部で十三あり、それを束ねる侍大将さむらいだいしやうが高砂備中守様で、お二人もその差配下で戦場に臨むことになる。

今日もお二人は、早朝の調練の後に武具庫の検分を命じられ、配下の兵士と共に大量の鎧櫃よろいびつを次々と上げたり下ろしたりして働いていた。武具庫には戦時に使う武器や武具のほか、様々な資料や陣幕などの戦道具も収められている。

凌介様は、次々と運び出される物具の中身を目録と照らし合わせていた。使えそうなものは打ち直して使い、傷みすぎているものは売って軍資金に変える。単調だが頭を使う厄介な作業だ。私はその傍らで、上役から次々に届けられる命令書に目を通し、返書をしたためたり、目録に朱筆を入れたり、とあわただしく祐筆役ゆうひつを勤めていた。

庫内には、いにしえの面白い武具も多数仕舞われており、当時の華やかで仰々しい（そして数倍も重たい）鎧を見つけたたびに、真咲様が興奮している。

「すげえな、これ」

あでやかな紅梅糸の胴丸に目も覚めるような萌黄緋もえぎおだいしの大袖を取り



出し、真咲様がうつとりと見入っている。虫に食われることもなく縁金も輝いているが、百年ほど前のしろものだろうか。

「それ別々の鎧だつて。売却だな」

「そんなこた解つてら。あああ、勿体ねえ！」

ちらりと見やった凌介様が淡々と指摘し、真咲様は抱えた大袖を名残惜しそうに櫃ひつの中に戻した。すべて天槻の公の財であるため、たとえ捨てるからと言っても、勝手に持ち帰ることは叶わないのだ。

「こっちの短槍、穂ほ先さき見てくれ」

凌介様は友の嘆きにはお構いなしに、どんどん作業を進めていく。水杖が姿を見せたのは、その時だった。

「朝芽、頑張ってる？」

入口で書簡の山に埋もれている私に小声で挨拶した水杖は、顔を引き締めると庫内に向かって呼びかけた。

「ご両名様、備中守様がお呼びです。すぐ本丸に来てくれと」

「オヤジどのが？」

真咲様が汗だくの顔を上げる。

「解った。」

床に雪崩た謎の小物を蹴っ飛ばしながら、凌介様がほこりだらけの姿を現す。

「すぐ行く。朝芽はここで留守居を頼む。暑いから、適当に休んでろな」

そう私に言うと、流れる汗をぬぐいながら凌介様は出て行った。

「水杖もここで留守番するか。二人いればいいだろ。後でオヤジんところから葛饅頭でもくすねてきてやるぜ」

にやりと笑った真咲様がその後を追って出ていく。水杖が嬉しそうに、承知いたしました、と答えた。

「ではお旗女様、お後をお願いいたしまする」

足軽組頭が直立する。隊長が武具庫を離れるので、その配下の兵士たちもひとまず中庭に戻ることになる。

「お疲れ様でございます」

会釈を返すと兵士たちも出て行き、庫内には私と水杖の二人が残された。

(2)

「すごい量ね。これを朝からやっていたの？」

机に山と積まれた和紙の束を見て、水杖が驚いたように言った。

「ええ。でも、主お二人の方がずっと大変よ。重い鎧櫃を次々と下ろして、一つ一つ点検なさっているの。選別の基準が私には解らなくて、お手伝いできなかった。一人座っているのが申し訳なかったわ」

「仕方ないわよ。この文書だって、溜めると地獄ですものね」

水杖が白い指で書簡をつまみあげる。まったく、地獄よねと私たちは声を合わせて笑った。

武具庫の入口に小さな影が差したのは、その時だった。

ふと眼を上げた水杖が、愕然と凍りつく。その恐怖すら含んだ驚きように、私も不安を感じながら、遅れて視線の先をたどった。

どきん、と心臓が跳ね上がる。

入口に、幽鬼のようにふらりと立っている小柄な人影。ばさりと垂れた前髪。どんよりと濁った生気のない瞳。

頬のこけたその顔は、数ヶ月前の忌まわしい記憶を瞬時に思い起こさせた。

そこにいたのは、岩見尽四郎のお旗女、早蕨だった。

岩見尽四郎。その名は私と水杖の中に、恐怖と不安の代名詞として刻まれている。

長浜の凶星。彼と出くわした、観瀆社殿の深更の東門。

私たちの旅立ちに、一抹の陰を落とした狂気の武人。早蕨はそのお旗女だった。

あの時、岩見は早蕨と私を交換するように迫ったのだった。岩見だけでなく、同輩と思っていた早蕨にまで常軌を逸した行動で傷つけられた、その暗い記憶が未だに恐怖のしこりとなって、私たちの心に染みついている。

引きずられるようにして連れて行かれた早蕨が、気にかかっていなかったわけではなかったが、岩見尽四郎は、歩兵隊長として辺境の城に赴任していると聞いていた。もう会うことはない、いや、二度と会いたくないと言うのが、私の本当の気持ちだった。

「あなた……早蕨」

水杖が絞り出すように言った。彼女も、同じ思いだったに違いない。

「どうして、ここに……」

早蕨は答えず、じっと私たちを睨んでいた。また、あの目だ。憎悪と悲しみに満ちた視線。岩見に小突かれながら、去り際に振り返って私たちを見たあの時の目だ。

彼女は、まっすぐ私を見ていた。ひび割れた唇がゆっくりと動く。

「朝芽……だね。あんた……うちの殿に逆らわない方がいいよ」

「……」

「さもないと、あんたの主が痛い目を見るよ」

相手の濁った声に、言葉を失う。

「忠告、したよ……」

この人はいったい、何を言っているのだろう……。

「なんなのよ、早蕨！」

呪縛から溶けたように、水杖が鋭い声を上げた。

「私たちは同じお旗女じゃない！ 朝芽が何をしたと言うの！ ただ、同じ日に選ばれた、それだけじゃない！ そんなことを言う理由があるならちゃんと話して！」

怒りをこめてまくしたてる水杖の方は一顧だにせず、早蕨はただ、私だけを見つめている。その唇が、かすかに動いた。

同じお旗女なんかじゃない。

「えっ？」

水杖が聞き返した時、早蕨はさっと身をひるがえすと風のようにその姿を消した。今までのほまるで幻だったのか、と思うくらい、それは一瞬の出来事だった。

立ち尽くす私の耳に、彼方の林で盛んに鳴く蟬の声が聞こえてくる。

日当たりのよい真夏の武具庫は蒸し暑かったが、私の顔には、びっしりと冷や汗が浮かんでいた。

どうして、早蕨がこの天槻城に居るのだろう。

その疑問はやがて明らかになった。

今、隣国に攻められていると言う辺境の城、坂遠城。岩見がいたのは、まさにその渦中の城だった。

なんでも、重要な防衛戦で取り返しつかない失態を犯し、責を問われるところをなにをどう操作したのか、この天槻に身一つで戻されてきたのだそう。しかも歩兵隊長という肩書はそのまま、おそらく縁戚の家老に泣きついたのだろうと言う専らの噂だった。武人としては名ばかりで、実力もなくただ暴力と背後の権力によって我意を押し通す岩見の悪行は、この天槻でも相当うとんじられている。

当の本人は、沙汰があるまで格別の役に就くこともなく、天槻を自分の屋敷のようにぶらついていた。失態に悪びれることもなく、巨体を揺らしながら歩くその後ろには、幽鬼のようによりそう早蕨

の姿もあった。二人に出会うとお城の小者までが目をそらし、その場からそそくさと居なくなった。

(3)

凌介様と真咲様は日も暮れかけた夕刻遅くに、連れ立って足輕長屋へと帰って来た。

帰城の支度と明日の予定を聞き取るために急いで迎えに出た私は、主たちの顔色を見て息をのんだ。

凶悪な顔で天をにらむ真咲様と、地面を鋭く見据えて無言の凌介様。その顔はひどく青白く、眉根には日ごろ見たことのない暗い影が落ちている。

「いかなされましたか。お具合でも……」

あわてて駆け寄った私に、真咲様が叩きつけるように言った。

「ああ！気分は最悪だぜ！ ああも酷え知らせを立て続けに聞かされちゃあな！」

「影、よせよ」

凌介様が低い声でつぶやく。その声には何とも言えない重苦しさがにじみ出ている。

「これが黙ってられっかよ！ けっ、胸糞わりい！ 長浜の奴らは何考えてんだ！ たった一人の老いぼれ家老が、そんなに怖いのかってんだ！」

「もうよせって。そこらじゅうに聞こえてる」

「凌介！ お前悔しくないのか！ お前の身になって俺は……」

「よせつつってるだろ！」

苛立ちを露わに凌介様は叫んだ。その鞭のような鋭い声に、真咲様が思わずごくりと言葉を飲み込む。

「俺だって喚わめきたいさ。喚いて事が変わるものならな！ だが……」

凌介様は不意にこぶしを握ると言葉を切った。顔を伏せたまま荒

々しく踵を返すと、立ちすくむ私と真咲様の横をすり抜け、無言で長屋の奥に消えて行った。

「いったい何が……あったのですか」

尋常でない凌介様の荒れ方に、見る間に不安でいっぱいになり、私はすぐるように真咲様に問いかけた。真咲様はしばし無言で険しい眉をひそめていたが、やがてふうっとため息をつくど、

「朝芽には、知る権利があるだろうぜ。悪い話の一つ。いや、お前たち主従には更にもう一つだ。」

言葉を切った真咲様は、じっと私の顔を見た。

「酷い話だぞ。……言ってもいいのか。」

「お聞かせ下さい。」

私は必死でその目を見返した。真咲様がため息をつくと言っていた。それは、想像以上に過酷な内容だった。

真咲様が言われた最初の悪い話とは、隣国に攻め入られた坂遠城のことだった。その戦況ははかばかしくなく、急造の砦は次々と落とされ、士気の下がった最前線では落城という言葉もささやかれ始めたらしい。名将と呼ばれた坂遠城主、不知禪ふちぜん通様の奮戦により、何とか最悪の事態は免れているものの、隣国の熾烈しれつな攻撃の背後では、例の妖人、湧上幻鬼配下の山賊軍団も暗躍しているとかで、慣れない山岳戦に辺境の精鋭軍も疲弊しているようだ。

しかし、これ以上に私の胸を締め付けたもう一つの悪い話とは、あまりにも衝撃的なものだった。

坂遠城の報告を聞き、今後の方針を伺って本丸から戻ろうとした凌介様を、備中守様が引きとめたと言う。

「公にはいえぬが上意である。以下心して聞け。」

いつもの磊落らいらくな口ぶりからは想像もできないほど、険しい顔つき

になった備中守様は、そう前置きすると沈んだ声で話し始めたそう  
だ。

先日備中守様は、長浜本城にて土岐家の筆頭家老を勤める、佐久  
間將監しょうげん長頼様に直々に呼ばれ、差配下出石いっしり凌介のお旗女朝芽を、歩  
兵隊長岩見尽四郎の元に鞍替くらがえさせるよう仰せつかったと言う。

尽四郎の強い要望により、朝芽を迎え、早蕨はお役御免とする。  
出石にはまた新たなお旗女を觀瀆社殿からつかわそう。

一方的に、そう申し渡されたそうだ。

「それで凌介は顔色を変えたが、オヤジに言ってもどうにもならね  
え。それで俺たちはすごすご引き揚げてきたのよ。情けねえ話だぜ  
全く。」

怒り狂う真咲様に何と返し、その後どうやって自室に戻ったのか、  
殆ど覚えがなかった。

視線も上手く定まらぬ中、雲を踏むような覚束ない足取りで見慣  
れた部屋に戻ると、私はふらふらと暗い板間に座り込んだ。

夏の長日がようやく西の山に隠れ、スミレ色の残照の空に一番星  
が輝いている。夕暮れの林をにぎやかしていたひぐらしの鳴き声も、  
今はもう止んでいた。涼しい夜風が窓から入り込んできて、私の髪  
をふわりと揺らす。

燭台を……ともさなくては……

頭では解っている、体が動かなかった。

脳裏では、真咲様から聞いた先刻の話がグルグルと回っている。

凌介様のお側を辞して、岩見尽四郎のお旗女に上がる……

『これは、上意である。』

筆頭家老佐久間長頼様は、長浜国の柱ともいわれる老臣だ。私に  
とっては、ご領主土岐定照様ちかひなりと同様、お顔も知らぬ雲の上のお人で

ある。この天槻城主様でさえ、道を譲ると言われる先祖代々土岐家一筋に仕えてきた大重臣だ。

その名だたるお人が、“長浜の凶星”岩見尽四郎の縁戚であり、事ごとに彼をかばう張本人であると知ったのも、この悪夢のような話があつてこそだった。日常、そのような個人の物言いが通るほどに、佐久間家老の実績と実力は絶対的なものだと言う。

もちろん筆頭家老と言われるだけあつて、その辣腕らっわんは過去に幾度となく長浜の危機を救っていた。岩見の件がなければ、評判はもっと高かつただろう。佐久間家老は武人ではなく、長浜にその人ありと言われた大政治家だった。老境に入るもますます弁舌鋭く、若き頃、京師みやこで鍛えた文官ぶりを彷彿ほうふつとさせているという。朝廷や諸侯に顔も広く、押しも押されもせぬ長浜本城いち一の人。そのお人が、直々に一侍大将である備中守様に声をかけた。備中守様に断る術はなかっただろう。ましてや、その下にいる凌介様に至っては……。

「心配すんな朝芽。お旗女制度は、建国以来続いてきた長浜の神聖な伝統だ。それを根底から揺るがすような今回の物言い、俺たちだって、はいそうですかと引きさがれるわけもねえ。これは明らかに個人ごとじゃねえか。この長浜に、あのじじい以外に岩見の味方なんざいやしねえ。何とかする。……何とかして見せるさ」

真咲様は、励ますようにそう言つてくださったが、状況は絶望的だった。

どれくらいの刻が経つたのだろう。気づいたとき、私は真っ暗な自室でただ一人、床の上にうずくまっていた。頭の中には、どこまでも寒々とした風が吹き荒れていた。今まで信じてきた世界が、音を立てて崩れていく感覚。

とてつもなく孤独を感じ、私はぎゅっと自分の胸を抱きしめた。今この瞬間、心底、凌介様に会いたいと思った。涙があふれ出す。頬を流れる涙が途切れるまで泣けば、少しは心も落ち着くのだろう



か。しかし涙はいつまでも止まってくれなかった。肩が震える。泣き声が漏れないように、私は袖をきつく噛みしめた。

〈続く〉

## 暗雲・後編

翌朝は最悪の寝覚めだった。結局殆ど眠れなかったが、朝の調練は待ってくれない。私は重い体を引きずるように起こし、早朝の中庭に出て行った。

凌介様の姿が見えなかった。再び本城に行かれたらしい。備中様と真咲様も一緒のようだ。

おそらく私の鞍替えの件で、お三方を煩わせてしまっているのだろう。そう思うと、本当に申し訳なく思った。と同時に、凌介様が傍らにいない現実には、言い知れぬ心細さと寂しさを感じた。あの笑顔に会いたい。それが自分の弱さだとわかつてはいたが、私はこみ上げる寂寥感をどうしてもぬぐい去ることができなかった。

唯一の救いは、真咲様が水杖を置いて行って下さったことだ。

水杖も自らそれを望んでくれたと言う。

「朝芽、元気出して。」

水杖の温かい手が、私の肩にそっとおかれる。

「きっとお三方で、談判に行かれたのよ。備中守様も尽力して下さいているし、なによりも、観滝社殿のお師様の決定をないがしろにするような、こんな理不尽な申し入れはきっと潰れるわ」

努めて朗らかな水杖の笑顔に感謝しつつも、私は沈み込む気持ちをどうすることもできなかった。

沈む気持ちに追い打ちをかけるようなことが起こったのは、午後の調練の最中だった。

凌介様が留守の間も、調練は滞りなく行われていた。実際の指揮は長柄隊三番隊長様が執っていた。年配の優しい方で、初めて傍らに勤める私に色々と気配りをして下さった。私は必死で笑顔を保ち、

お勤めに過ちのないよう、目先のことに集中しようとした。

隊長について、立てかけてある長槍の数を手元の覚えに書きこんでいた時だった。不意に私は、背後から激しい力で突き飛ばされた。あつと叫んでとっさに地面に手を着く。矢立てが吹っ飛び、抱えていた半紙が派手やかに飛び散る。

「何をなされる！」

隊長の鋭い声がした。振り返った私は、嘲るような笑みを浮かべてすぐ背後に立ちほだかる、岩見<sup>いわみじんしろう</sup>尽四郎の姿を呆然と見上げた。その傍らには、変わらず早蕨<sup>さわらび</sup>が従っている。

岩見のねばりつくような視線。それは土の上に半身を起した私を……額から足の先までを、舐めまわすように見ていた。好奇心なのか、それとも品定めなのか……。それはやがて自分の元に来るであろう新しいお旗女の立ち居振る舞いを、ねつとりと観察しているように見えた。

早蕨が背を丸め、岩見の背後から陰気な瞳で私を見下ろしている。彼女は此度のお達しをどう受け止めたのだろう。私が岩見の元へ行けば、彼女はお役御免になると言う。それは即ちお旗女にとって最も厳しい処置……長浜城下からの追放を意味していた。辛くは無いのだろうか。それとも、自由になれると喜んでいるのだろうか。彼女の赤く充血した目は、何も語らない。

ぞっとする思いで、私はあわてて立ち上がった。申し訳ございません、と呟きながら、散らばった半紙を集めに回る。

「岩見殿。何か御用か。」

三番隊長の咎めるような声を見無視して、岩見はにやにや笑いながら、ずっと地にかがむ私を見つめていた。巨漢の常軌を逸した振る舞いに、隊長が眉根をぐっと寄せる。

落としたものをすべて拾うと、隊長に促されるまま、私は足早にその場から離れた。しかし背中には、絡みつくような主従の視線が、いつまでも突き刺さっていた。

三日が、のろのろと過ぎていった。

岩見の無言の観察は、その後も頻繁に続き、ある時は長屋の入口で待たれていたこともあった。やはり無言で、草鞋を脱いで上がる私の動きを、薄笑いを浮かべてじっと見ている。昼日中、長屋で帳簿をつけている時、窓からいきなりつりとした顔にのぞきこまれ、悲鳴を上げて飛びのいたこともあった。震える私に、肝の小せえ女だと、蔑むように岩見は言った。その目には、明らかに面白がっている光があった。

かすかな物音にも怯え、夜も眠れない日々が続いた。うとうとしては悪夢に襲われ、汗だくになって飛び起きる。凌介様は戻らず、何のお沙汰も得られないまま、私は日々氣力を振り絞るようにして、変わらぬお勤めを果たしていた。

四日目の朝、ふらつく身体を無理やり起こして庭に出た私は、すぐそこに立っている凌介様の具足姿を見つけた。昨夜のうちに、帰ってこられたのだろうか。

見る間に安堵が湧き起こり、おもわず両手を握りしめた。凌介様はそこにいるだけで、何か大きな壁で守られているような、そんなほっとするものを感じさせてくれる。岩見の姿も、さすがに今は見当たらない。

すぐ私に気付いた凌介様は、落ち着いたまなざしで軽く頷いてくれた。一瞬、すべてがうまくいったのだろうかとかと淡い希望が浮かんだが、すぐに、そんなはずはないと打ち消した。指揮を執る凌介様の横顔に、拭うことのできない影を見たからだ。しかし私は頭を強く振って、湧き起る不安を打ち消した。未来はどうあれ、今この瞬間、私の主は凌介様なのだ。先の不安に囚われて、今をおろそかにしてはいけない。私は、お勤めに要る書簡の束を取りに自室に駆け

戻った。

やがて、砥ぎ上がった直槍すぐやりの稽古が始まった。私は、いつものように矢立てを持って、主の傍らに控えた。手元の紙に、言われたことを書きつけていく。色々な細かい指示の後、凌介様がふと眉をひそめて私を見た。

「随分顔色が悪いな。朝芽、大丈夫か」

「大丈夫です」

答えたものの、先ほどから酷い頭痛がしている。

「無理もないよな。俺も、酷い気分だぜ」

凌介様が小さくつぶやく。やはり話し合いはうまくいかなかったようだ。しかし、彼はすぐ気を取り直したように笑みを浮かべると、「あれから俺も頭を冷やした。今悩んでも仕方がない。俺たちは武人だ。目の前のやるべきことをやるしかない。心配すんなって。お前のことは諦めない。岩見になんか渡せるか。不安だろうが、もう少しだけ耐えてくれ。俺も、全力を尽くすよ」

「お願い……いたします」

私も微笑み返した。もう、どうにもならないのだと解ってはいた。だけど、たとえ気休めでも諦めないと言ってくれた主の言葉はとても嬉しかった。凌介様だけではない。会うたび心配してくれる水杖や真咲様。それに陪臣の私のために動いてくれる備中守様。沢山の人が私を支えてくれているのだ。

「ああ。任せとけて」

力強く胸をたたいた凌介様は、また上役の顔に戻ると、

「新しい陣立て表を書いてほしい」

ときばきと次の指示を述べ始めた。

「はい」

筆を取り直した時、ぐらりと一瞬視界がゆがんだ。私はぐつと唇を噛んでそれに耐えたが、ぎらぎらと照りつける真夏の太陽光に身体がまるで焼かれているような違和感を覚えた。

嫌な汗が全身から吹き出す。気分が悪い。

「すまんが、それを明日までに……朝芽？」

凌介様が何か言う声がした。その声が途中で聞こえなくなった。すつと目の前が暗くなる。膝から力が抜けるのが解った。矢立てが地面に落ちる音。

「朝芽！　しっかりしろ！」

叫び声と共に、具足の腕が、崩折れる体を受け止めてくれた。しかし、私が覚えているのはそこまでだった。

夢を見ていた。

夕日に染まる黄金色の泉。滝の音も鳥のさえざる声も聞こえなかった。すべての気配が水に吸い込まれたように、しんと静まり返っている。私はその中で一人立ちつくしている。胸に青磁の甕を抱え、まるで小さな子供ののように、途方に暮れて水の中に立っている。

泉の向こう岸では、凌介様が、見知らぬお旗女と親しく話し込んでいる。夕暮れの光に照らされて、黄金色の鎧がキラキラと輝く。真咲様と水杖の笑顔も見える。すぐ近くにいるのに、その姿はごく遠い。

美しいその光景を、私はただ黙って見つめているだけだ。私には行くことのできない、輝くその岸辺を。水杖が明るい笑顔で見知らぬ女性に話しかける。真咲様が大声で笑い、凌介様も微笑んでいる。誰もこちらを見ない。彼らの中に私はもう……居ないのだ。

「いつまでもすがりついている。お前には最早縁のない世界に」

不意にだみ声が背後で響いた。振り向くと、すぐ後ろに岩見尽四郎のつるりとした顔が、……顔だけが、にやりと口の端をゆがめて浮かんでいた。

私は金切り声を上げて顔を覆い、泉の中に倒れ込んだ。

「朝芽！ ……おい、朝芽！」

突然力強い腕が両肩を支え、激しく宙に浮いているような感覚の体をしっかりと抱き止めてくれた。

私はぼんやりと視線をさまよわせた。靄がかかったような頭でも、自分が日暮れの自室に寝かされていると言うことが、おぼろに理解できた。

目の前には、斜陽に赤く照らされた凌介様の懸命な顔があった。頬にばらりとかかった栗色の髪が、夕陽を受けて金色に輝いている。不安げに寄せられた眉。見開かれた大きな瞳が、気遣うように私を覗き込んでいる。

「……凌介様……」

「大丈夫。大丈夫だから、落ちつけて……」

穏やかな低い声。温かい手のひらが、額の汗をそっと拭ってくれていた。もう片方の腕は背中にまわされ、覚束ない私の体をしっかりと支えてくれている。おそらく悲鳴を上げて飛び起きた私を、すぐに抱き止めてくださったのだろう。

「……調練は……」

「真咲が代わってくれた。悪い夢、見たんだろ。側についてるから、安心しろって」

「……申し訳、ございません……」

「解ってる。……もう、何もしゃべるな」

優しい声が、苦痛でズタズタになった心にすうっと染み渡る。

温かい安堵の波が、その腕から伝わって来て、硬直した身体を優しくほぐしてくれる。ほっと肩の力を抜いた私は、再び深い眠りの中に落ち込んで行った。

再び目覚めたとき、すでに辺りは真夜中になっていた。天頂には大きな月が美しく輝いていた。部屋は闇の中に暗く沈み込み、ただ、窓の下におかれた文机だけが、差し込む月明かりの中に重々しく浮

かび上がっている。

胸に掛けられた薄い布団をそっと外して、私はゆっくりと身体を起した。久しぶりに深く眠れた心地がする。悪夢を見て飛び起きた後、凌介様の温かい腕に包まれて再び眠りに落ちた記憶……あれもまた、夢だったのだろうか。

夢ではなかった。

凌介様は、まだそこにいた。刀を抱いて胡座こざしたまま、部屋の壁にもたれて、すうすう寝息を立てている。

少しやつれた美しい寝顔。薄い唇を軽く結び、長い睫毛がそっと閉じられている。本城との往復に、休む間もない調練。きつとお疲れだったろうに、突然倒れた私にずっと付き添っていてくださったのだ。

ありがとうございます。

そっとつぶやく。私のために、ここまで懸命に力を注いでくれる凌介様の気持ち、今は何よりも嬉しかった。

あどけなくも見えるその寝姿に薄く布団をかけると、私は静かに板床の上に座った。窓から差し込む月の光に照らされて、二つの影が黒々と部屋の隅まで伸びている。長屋はしんと静まっていた。時折ふわりと吹き込む夜風、軒端のきはにすだく虫の音が、涼やかな夏の夜を盛り上げている。

凌介様の穏やかな寝顔を見つめている内に、私の中には、今までと違うある静かな覚悟が芽生えてきていた。

あの悪夢。岩見らしき顔に言われた言葉が、ゆっくりと脳裏によみがえる。

『お前には、最早縁のない世界に』

今までこそが、夢だったのかもしれない。

大切な主にかげがえのない親友。それに快活な真咲様。四人でど



こまでも進んでいけると、いつしか思い込んでいた私への、これは重い戒めなのだろうか。

お旗女は基本、ただ一人の主にしとお仕えしない。しかし過去には病や討死などで、泣く泣く大切な主と別れた者も多くいた。また、主との絆を上手く結ぶことができずに、冷たく追放されたお旗女もいる。

『さもないと、あんたの主が痛い目を見るよ』

『これは、上意である。』

これ以上逆らい続ければ、凌介様を危難に陥れることになるかもしれない。

哀しかりうが、理不尽だろうが、これが現実なのだ。

どれだけ苦しもうと、個人の想いなど一顧だにされる筈もない。武人の世界に生きる以上、当然此度のような汚い駆け引きもあるだろう。誰しも春の輝きの中だけでは生きていけない。

岩見尽四郎……それが、私に与えられた運命だと言うのなら。

運命を受け入れよう。その先に苦難があるなら、立ち向かおう。

それが、観瀆社殿みたきしゃでんで培われた、お旗女の心構えではなかったか。

岩見の振る舞いを見る限り、その元に行くことは、おそらく地獄の苦しみになると言う予感があった。しかし、そんな未来も覚悟の上で、私はお旗女として、厳しく育てられてきたのではなかったか。

暗い部屋に端坐し、一人静かに考え続ける。それはどこか氷のように冷たい諦めだったのかもしれない。

「朝芽、起きたのか」

不意に名を呼ばれて、私は、ハッと顔を上げた。

いつから目覚めていたのだろう。気がつけば、凌介様の黒々とした瞳が、いたわるようにこちらを見ていた。

「……もう、いいのか」

強張った体をほぐすように、腕を大きく曲げた凌介様が、ほっとしたように笑いかけて来る。

その笑顔に、ぐっと心が締め付けられる。

「ありがとうございます。もう、大丈夫です」

波立つ気持ちを鎮めながら答えると、明るい顔が帰ってきた。

「冷湯でも飲もう。ちょっと待ってろ」

「凌介様」

軽快に立ち上がって、部屋を出て行こうとする主の後ろ姿に、私は思い切って声をかけた。

ピタリ、とその足が止まる。

「私は、岩見様の元へまいります」

「……冗談きついよ」

凌介様は向こうを向いたまま静かに言った。

「冗談では……ございません」

凌介様が振り向く。そのまま素早く戻ってくると、私の前にしゃがみこんだ。両肩を温かい手がぐっとつかむ。

「何言ってるんだ、朝芽。お前をあいつの元へなんか行かせない」

「いいえ。私は岩見様の元へ参ります。そして懸命にお仕えして、必ず凌介様の名に恥じぬ働きをして見せます」

「やめろよ……」

「それに同じお城ですもの。またお会いできる機会もございましたよ。う。」

「そんなこと言うなって！」

やにわに激情をほとばしらせた凌介様は、次の瞬間、私の肩を掴んだまま、がっくりとうつむいた。

「頼むから……そんなことは言わないでくれ……」

その手がかすかに震えているのを感じた瞬間、私の目から涙が吹きこぼれてきた。しかし私は顔を伏せなかった。強くならなければ。そう自分に言い聞かせながら。

「岩見様の元に参る。それが上のご意向であり、果ては凌介様のお為になるのなら、私はそれに従います。それが……」

言葉を切った私は、まっすぐ主の君を見つめた。

「それが、お旗女の道であると心得まする」

あふれる涙をそのままに、私は、静かに言葉をつないだ。

その一瞬、凌介様は、私の肩に掛けた腕にわずかに力を込めた。  
無言で伏せられた顔は、いつまでも動かなかった。

「……ったく、情けねえ話だよな。自分のお旗女一人守れねえなんて……」

やがて、こぶしを握り、言葉をぎりぎりと噛みしめる凌介様の苦痛の声が、私の心に悲しく響いた。

〈続く〉

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1247ba/>

---

長浜☆戦国時代

2012年1月11日03時45分発行